御製

予等はみな軍のにはに出てはて丶
　おきなや獨り山田守るらむ

千早振る神のこゝろにかなふらむ
　わかくに民の盡すまことは

よもの海みな同胞とおもふ世に
　なと波風の立ちさわくらむ

求道第一卷第十號

目次

◎感謝は信仰の反射也　《社說》
日曜講話
◎親鸞聖人の人生觀　近角常觀
◎修養座談　加藤玄智
同一戯味
◎無題錄　鈴木卓苗
◎大勇猛心　有馬祐政
◎親むことの力　求道學人
◎盲者は幸也　百目木劍虹
風尙餘韻
◎煩悶兒水野　鶴田耿介
◎水蔭草　沽泉
◎故ハーン氏　梅津和軒
▲新刊紹介▼
政教時報
◎編輯だより◎第二求道會記事
◎獨乙たより　久保猪之吉

求道　第一卷　第九號

感謝は信仰の反射也

秋宵天高くして星光燦然たり、銀河流れ、北斗横はり、無數の天體各其軌道を畫きて運行す。急なるあり、緩なるあり、大なるあり。小なるあり、遠きあり、近きあり、而も、一絲も紀律を紊ることなく、一瞬も其調和を亂ることなし。宜なる哉、ピタゴラスは天文を以て自然の音樂なりと斷言すること。洵に無聲の音樂は微妙の曲を奏して、永刼の間、絶對の靈境を謳歌讃美せるものゝ如し。而して吾人何等の幸か、絶對佛陀の慈光を蒙りて此の如き祕曲に與かるを得たる。吾人仰て絶對の極なきに仰嘆し、俯して恩德の深きに感泣し、胸中油然として感謝の情身に溢る。吾人は何か故に、爾かく感謝の情を起し來るかを知る能はず、然れども一たび絶對の信仰に接し來りしより、彼蒼々たるの天、此茫々たる野、皆多大の意義を持來らざるはなし。親鸞聖人、日藏經月藏經を繙きて、日月二十八宿を初めとして四洲、四天、三十三天乃至天神地祇悉く信佛の人を護持養育し玉ふといふ。此に至りて吾人は聖人の世界觀が如何に深遠なるかに驚かずんばあらず。蓋し聖人の信じ玉ふ所、唯一佛陀の慈愛あるのみ。聖人の歸し玉ふ所、絶對如來の光明あるのみ。必ずしも日月星辰、山河大地の本體に於て佛陀を認むるに非さる也。而も此の如く其信仰より反射し來る餘光は、靈妙なる一大世界觀を陶鑄し來りて、見るもの、聞くもの、皆感謝の材料たらさるなし。是れ聖人の信仰か如何に簡潔質樸にして、如何に要領を得たりしかに起因せずむばあらざる也。

蓋し親鸞聖人の信仰たるや、生ける如來の慈愛を直接に胸中に於て實驗し玉ひし所、一言以て之を盡せば信の一字あるのみ故に聖人の眼光を以て達觀するときは、一代八萬四千の佛敎を淨土三部の妙典に攝め、三部經を大無量壽經に攝め、大無量壽經を彌陀の第十八願に攝め、第十八願を三信に攝め、三信を信樂の一に攝め、而して信樂は即信心歡喜にして結局信の一字

に攝し來る。聖人の信仰は此の如く一切の力を集め來りて皆此一點に攝めざるはなし。聖人の信仰は一心なり、專心なり、專念なり。一切の功德、一切の行法、皆信仰の一點に集中し來りて餘蘊なし。既に此の如く信仰の力深くして且つ遠し、故に其信仰已外に何物をも認むるなく、亦何物も其用なし。唯一切の事物は其信仰を中心として皆是より流れ出づる感謝ならざるはなし。故に其感謝や廣くして殆むど極まる所を知らず。一たび信仰の地位に達して行ふ所、何物か感謝ならざるものやある。一遍の稱名も報恩たらざるはなく、一擧手一投足も亦感謝たらざるはなし。水は是僅かに一盃の水なり、而も皆是佛恩の賜ならざるはなく、一呼吸の空氣亦是師恩の惠ならざるはなし。此に於てや、偉大なる世界觀を生じ來りて、宇宙の大なる、須彌の高き、乃至日月星辰に至るまで、皆吾人の信心を守護し養育せざるものなきに至る。

無情の世界猶且つ此の如き多大の意味を持來りて吾人が感謝の衷情を促す。況んや、有情の人間一層深遠の意義を持來らざることやある。無心の星辰猶無聲の音樂を奏して絕對の靈境を謳歌す。有心の人生豈哀婉なる音樂を奏せざることやあらん。首を回らして人生を見る、未だ信仰に達せざるや、洵に茫乎として適歸する所を知らず。而して右に往き、左に歸り、其足跡蹣跚として醉人の路を行くが如く、前に進み後に退き、尺蠖の屈伸するが如きのみ、一たび絕對の靈光に接し來りて後、初めて之を顧る、彼の蹣跚たる行程此迂折せる徑路、皆是行くべきの所に行き、過ぐべきの路を過ぎ來りて、遂に最後に靈光に達したりしのみ。吾人の稱して直と云ひ、迂といふ所以のもの、何ぞ知らむ、絕對の靈境より之を一瞥せば、直必しも直たらず、迂亦何ぞ迂ならざるなきを知らむ。時としては逆惡却て是れ得信の因緣にして苦悶亦是れ求道の關門たること多し。親鸞聖人文類總序に喝破して曰く。然則淨邦緣熟して、調達闍世をして逆害を興さしめ、淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選はしめ玉へり。是則權化の仁齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲正しく逆謗闡提を惠まむとすと。何ぞ其信念の沈痛にして感謝の情の敬虔なる。嗚呼王舍城中に於ける一大悲劇は聖人が信仰的眼光に映じ來る所、皆悉く絕對の光明を人生の上に顯現し來る活劇たらざるはなし。頻婆沙羅王の敬虔なる信仰家たる、獄中死に至るまで從容として法を樂める。韋提希夫人情愛の濃かなる食を王に運びて其子の爲めに幽閉せられ、獄中苦悶の極、道を世尊に求むる。世尊忽爾として獄中に慰問し玉へる。夫人五體を

地に投して求哀懺悔せる。世尊言く、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る遠からず。汝應さに念を繫けて、彼國の淨業成し玉へる者を觀すべしと。夫人廓然として大悟して無生法忍を得、五百侍女亦求道の心を起せる等、皆何れも信仰の實驗として何ぞ適切なる。況んや、阿闍世王自ら其罪惡を自覺し來りて身を苦しめ、心を痛ましめ、一大惱亂に陷りて最後に佛所に詣で、一大慰籍を享け、叫て曰、我伊蘭子より伊蘭樹を生するを見る。未だ伊蘭子より栴檀樹を生するを見ず。而して今伊蘭子より栴檀樹を生ずるを見たりき。伊蘭子とは我身是也、栴檀樹とは我心無根の信是也と云ふが如き、何ぞ其痛切を極むる。親鸞聖人直ちに涅槃經に於ける此等の文字に着眼し、採りて以て自己が實驗を告白するに代へ玉ふ。故に自ら先づ深刻なる懺悔を捧げて曰哀哉、愚悉戀、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず。眞證の證に近くことを快まず。耻づべし、傷むべしと。嗚呼王舍城中に於ける悲劇は、乃ち吾人の胸中に於ける悲劇也。古代印度に起りし活劇は千古人生に起るべき活劇也。而して韋提希夫人を獄中に照し玉ふ光明と阿闍世王が苦惱狂亂の中に實驗したる信仰とは、苟も人生のあらむかぎり何人が此實驗を經ずして一大樂地を見出すことを得べき。實に聖人の彼悲劇を見玉ふや直ちに是れ自己をして信仰を獲得せしむる佛陀自在神力の活劇なりと喝破して、一大感謝を捧げ玉ふ。何ぞ聖人が自ら罪惡の凡愚を告白して、絕對限なき佛陀の明月を心中に宿して一點の私を雜へざる。何ぞ其人格の偉大にして尋常の尺度を逸するの甚しき。和讃に曰く、彌陀釋迦方便して、阿難目連富樓那韋提、達多闍王頻婆沙羅、耆婆月光行雨等。大聖をの〳〵もろともに、凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけりと。

嗚呼王舍城の舞臺は乃ち人生の舞臺なり。首を回らして人生を顧る、洵に人生は皆是信仰を迫り出すの活劇也。千水萬江滔々として東に流る、皆是信仰海中に陷りて同一鹹味たらざるはなし。此に於てや、人生何物か感謝の情を催さゞるものやある、我を愛するもの、我を怒るもの、我を讃するもの、我を譏るもの、皆是同じく佛陀の恩寵たらざるはなし。此に於てや、彼無聲の音樂を奏するもの、豈啻に日月星辰のみならむや。人生は實に活ける一大合奏也。百千無量の音聲は一大調和をなして絕對の靈境を謳歌するものゝ如し。吾人何等の幸か亦此秘曲に與かるを得たる。唯胸中を塞ぎ來るものは感謝の讃美あるのみ

和讃に曰く、百千倶胝の劫を經て、百千倶胝の舌を出し、舌ごと無量の聲をして、彌陀を讃めむに猶盡きじと、此に至りて吾人無言淵默、佛陀の足下に伏して感泣するあるのみ。

此の如く微妙の世界觀と、偉大なる人生觀とを起し來りて、敬虔比類なき感謝を涌出せしむる親鸞聖人の信仰の源泉は如何に絶對無限なるかに驚かずむはあらず。聖人の吉水の禪房に在りて、法然上人に侍し玉ふや、聖人他の同僚の中にありて獨り主張し言はく。源空聖人の御信心も善信の信心も一つなりと、同僚頗る不遜の言として之を咎む、遂に直接源空聖人に質す。源空聖人答て曰く。源空が信心も如來より賜はりたる信心なり、善信房が信心も如來より賜はらせ玉ふ、されば一つなり。別の信心にて在しまさむ人々は我參らむ淨土へは、よも參らせ玉はじと。蓋し此一小話は遺憾なく、聖人が絶對の信仰を側面より畫き來りて餘蘊なし。看よ信仰の一點に至りては淺深、高下の區別を見ずして全く同一を主張し玉ふ。何んとなれば絶對界に程度階級なければ也。蓋し信仰の一點に於て先師と區別なしといふ、當時他人は頗る不遜の言として之を驚きしも洵に理也。然れども聖人の胸中管に不遜ならざるのみならず、寧ろ直接自己の胸臆を披瀝し玉ひし者。若し吾人の地位より之を仰くときは、寧ろ聖人が先師に對して一點の私なきは、やがて是れ先師と同一の信仰たる所以にあらずや。聖人告白して曰く。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられ參らすへしと、よき人のおほせをかうふりて信する外に別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんへるらん總してもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すへからずさふらふ。そのゆへは自餘の行をはげみて佛になるへかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめいつれの行もおよひがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかしと。是常に反覆拜讀する告白にして、幾度反覆するも遂に其味の盡くることなきを覺ふ。抑々吾人が結果の如何によりて信念を二三にするが如きは、自己心中に猶自ら爲すあるの餘地を存すればなり。猶爲すあるを自信するもの何ぞ五體を地に投して求哀懺悔するを得べき。吾人自ら吾人を顧る、愛欲の廣海何ぞ此の如く深き、名利の大山何ぞ此の如く險なる。吾人既に之に沈み、之に迷ふ。何の所にか津梁を見、何の所にか導者を

尋ねむ。地獄は必定すみかぞかし、實に是れ吾人內心の實驗にあらずや。吾人現に苦惱の火焰に燒かる、永劫死の關門は暗黑の世界を開きて吾人を迎ふ。古の所謂、往くも亦死せむ、止るも亦死せむ、歸るも亦死せむと云ふもの、實に吾人の境遇にあらずや。吾人彼阿闍世王と何ぞ撰ばむ、此間に於て一道の光明を見る、豈渴仰せざらむや。『無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障をもしとなけかざれ。』既に難度海を渡るの大船を得たり、無明の闇を破るの慧日を得たり。何ぞ其結果の淨土たり、果た地獄たるとを問はむ。若し法然上人に欺かれて地獄の苦を受く、何ぞ厭はむ。若し佛陀に伴ひて火焰に燒かる何ぞ辭せむ。既に苦を受け、火焰に燒かれつゝある身なれば也。唯聖人の眼中に映する所法然聖人の敎化あるのみ、彌陀如來の本願あるのみ、聖人の胸中直ちに佛陀の本願に接し、直ちに先師の信心を寓す。曰く、彌陀の本願まことにおはしまさは釋尊の說敎虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば善導の御釋虛言したまふへからず。善導の御釋まことならは法然のおほせそらことならんや。法然のおほせまことならは親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふ歟と。嗚呼聖人の眼中彌陀と善導と法然上人との區別なし。彌陀の本願は直ちに是れ善導の金言に結晶されたるものにして、善導の金言は直ちに法然上人の念佛を陶鑄したる者、而して法然上人の念佛は即ち親鸞聖人の絶對的に信憑し玉ふ一大地盤にあらずや。法然上人の敎化を以て直ちに彌陀の本願也と確信して一點の私を雜へざるは、やがて是れ親鸞が申す旨亦以て空しかるへからず候歟と云へる無意識中に偉大なる確信を顯はし來る所。即ち是れ源空聖人の御信心も善信が信心も一つ也と喝破して毫も憚らざる所以にあらずや。

此の如く、先師と同一の信仰を主張する聖人は、弟子に對して亦絶對平等を主張して少しも謙遜の氣色だになし。曰く。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。そのゆへはわかはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはゝこそ弟子にてもさふらはめひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて念佛まうしさふらふひとを。わが弟子とまうすこと、きはめたる荒凉のことなりと。嗚呼聖人の眼中弟子に對して亦一點の私なし。唯如來の敎法を我も信し人にも敎へきかしむるはかり也。既に此の如く少しも私を雜へざるは全然如來の御心を傳ふるなり。故に曰く。如來の敎法を十方衆生に說ききかしむるときは、唯如來の御代官を

まうしつるはかりなりと。嗚呼如來の御代官、絶對的に私なきはやがて絶對的に無意識に佛陀其自身を代表するもの也。此に至りて吾人は聖人を以て直ちに是れ佛陀自身の權化なりと確信するの外一點の餘地を有せざるなり。噫聖人が先師に對して全然心服し玉ふは即先師と平等なる信仰を有する所以にして、弟子に對して全然平等に立ち玉ふは即千百年の末幾百萬の弟子に心服せられ玉ふ所以也。

聖人の胸中既に此の如き信仰の源泉を貯ふ。是より流出する感謝の衷情は滾々として盡くる所を知らず。世界の廣さ、人生の遠さ、何れの所にか此清新なる信水の溢れざることやある。感謝は洵に信仰の投影也、信仰の反射也。既に先師の教化を以て直ちに彌陀の本願なりと信じ玉ふ。直ちに先師を以て智慧の結晶大勢至の權化也と渴仰し玉ふ洵に故なきに非ざる也。而して此の如き信仰に導き玉ひし聖人有緣の教主聖德太子は實に是れ慈悲の結晶觀音の權化也と確信し玉ふ。此に於てや、我二菩薩の引導に順して如來の本願を弘むるに在りとの人生觀世界觀を生ずるに至る。嗚呼親鸞聖人の信仰や。無限感謝の圓周を畫くべき中心なり。絶對感謝の光明を放つべき焦點なり。若し此信仰の中心に立ちて感謝の涙を灑ぐ、宇宙何物か其圈内に入らざるものやある。此信仰の焦點に立ちて感謝の光を仰ぐ人生何の處か慈愛の溢れざることやある。蓮如上人新らしき衣を叩きて南無阿彌陀佛也と感謝し、疊に坐して南無阿彌陀佛にもたれたる心地なりと嘆じ玉ふ。蓋し感謝の至情横溢瀰漫するものたらすむはあらず。嗚呼人生に於ける百千無量の太陽系統は皆絶對信仰の佛日を中心として、無量劫の間感謝の讃美を歌ふ於戲大なる哉。

日月年時大小星宿を安置す、又大星宿其數八あり、又小星宿二十八あり皆悉く隨喜し安樂ならん、又々四天王を須彌山の四方面所に安置す、又鬼神を置きて而も之を守護せしむ、又千萬億の一切覽軍遂に須臾も害を爲すこと得ることあたはず、乃至此の如きの天師梵諸天王を首として兜率他化天、化樂須夜摩、よく此の如きの四天下を護持養育せしむ、四王及び眷屬又々よく護持せしむ、二十八宿等及び十二辰、十二天童女、四天下を護持せしむ、其所生の處に從ひて觀鬼羅刹等他の教をうけずはかしこにかへり護をなさしめん、天神等莠刪して願して佛分布せしめたまへり、衆生を憐愍せしかゆへに正法の燈を熾然ならしむ（化卷所引日藏經及月藏經）

日曜講話

親鸞聖人の人生觀

近角常觀述

諸君も御存の如く此頃は親鸞聖人の紀念を營む報恩講の時節となりました。聖人の事は始終申て居るのてありますが、かゝる時節に當りて特に御話するも無益でないと思ふて此題を出したのてあります。

聖人の人生觀と申しましても單にこれだけを御話する事は出來ませぬ。つまり聖人の全躰を御話せねはなりませぬから平日申して居ります事を重複する樣てはありますか、私は何遍でも繰返して新たなる靈光に接せんと思ふのてあります。親鸞聖人の人生觀を知るには、先づ其人格を見なけれはなりませぬ。私はつく〳〵聖人の人格を考へて見ますするに、俗にいふ宗旨根性てなく、一種異なれる實にえらい人格てあると思ふ、私は聖人の人格か誰よりえらいとか、世界一番の宗教家てあるとか、そういふ風に階段的にえらいといふのてなく實に絶對大の人格てあるといふのてある。成程我國の歴史にも宗教家としての大人物も澤山ある。傳教、弘法、榮西、道元、等皆一宗の祖師であつて、各其特徴もある。例へは傳教の博覽、弘法の奇警、榮西の氣拔、道元の溫乎、何れも敬慕に堪えないが、然し是等のものは皆類のあるものてある。傳教弘法の博覽奇警も、慈覺、智證等に於て見る事が出來る。又道元榮西の人格も他に於て見るとが出來る。

私か類の無き人格といへは已に諸君は日蓮上人を思ひ出さるゝてあろう。然しこれは著るしく目に見えて變りて居るから何人も能く知て居る。親鸞聖人の類なき人格に至りては日蓮の如く直ちに眼に見ゆる點の少ないからして餘り能く知られて居らぬ樣てある。實に信仰の上より見たる親鸞聖人は、全く佛の示現てある、恰も基督教に於て基督を見る如く最早普通の人格として見る餘地はない。然し是迄夫れ程に渴仰されて居られない方々より御覽になれば、或は夫れは唯信者のみがそう思ふ丈の事てあろうと思はるゝかも知れないが、然しろれは全く聖人の人格を御存しない人の言といはねはならぬ。私も此大なる聖人の人格を遺憾なく發表する事は到底出來ませぬが、出來る丈深く話して見ようと思ふのてあります。

先つ第一に親鸞聖人か著しく他の宗教家と異りて居る點は人格かむやみに大きい。こういふと世間て普通いふて居る大人物とか、大豪傑とかいふ風に聞えるが、世間ていふて居るのは彼人は誰よりもえらい、誰よりも大きいといふので、そんなものは相對的比較的の事てある。今聖人の人格か大きいといふのは相對的や比較的てなく、もう絶對的に大きい。此大なる人格の中には總てのものを包容して更に餘す處かない。聖人の人格は宗教上からいへば、其信仰か人格を作りたともいへるが、又歴史的にいへば、人格か信仰を顯はした

ともいへる。兎に角聖人の信仰夫自身が親鸞聖人ぢや。度々いふ事であるが親鸞聖人程要領を得た信仰は無い。廣漠なる一代佛敎の中で、先つ淨土の三部經を舉げ、三部經の中から彌陀の四十八願を取り、四十八願を第十八願の一願に攝し、十八願は至心信樂欲生の三信、此三信は即ち信樂の一信に歸する。つまり一代佛敎といふも、佛を信するといふ信仰に歸着するのである。そこで此信仰さへ解れば、親鸞聖人の人格も人生觀も世界觀も皆解決が着くので來る。親鸞聖人の信仰が絶對的に大きいといふのは、諸君も御存知の如く、聖人が法然上人の門に待せしの當時、我信心と師法然上人の御信心と更に變る所なしと、いはれしより勢觀房、念佛房抔申す御弟子方、これ以ての外不遜の振舞なりとて爭論に及ひたるに、聖人は徐ろに是に答へていはるゝには、師上人の御智惠才覺廣くおはしますに、ひとつならんと申さばこそひがごとならめ、往生の信心に於ては、全く異なる事なし、たゞ一とつなり。御傳鈔にも上人の御信心も我信心もなとか等しと申さゞるべきや、其故は深智博覽に等しからんとも申さはこそ、誠におほけなくもあらめ、往生の信心に至りては、一度他力信心のことはりを承りしよりこのかた、全く私なし。然は上人の御信心も他力より給らせ玉ふ、善信か信心も他力なり故に等しくしてかはる所なしと申すなりと、全躰彼の人は信仰か深いとか、彼の人は淺いとかいふて居るのは信仰に程度を見て居るのてある。絶對の信仰には、そんな程度のあろう筈のものてない。聖人か廿九歳にして叡山を下りて法然上人の門下に入り、直ちに此奇拔なる事を仰せられた所抔は實に能く其人格を見る事か出來る。親鸞聖人か法然上人の仰を聞かれて、實に有り難い、能く〳〵我身を顧みれば、智惠も修行も何も見通がつかぬけれども、念佛の中には不可稱不可說の大威力のある事を說ける信仰を聞かれた時は最早聖人は師匠の人格と其仰とを別々に信するといふ樣な餘地はなかつた。即其人格も其仰も全く信せられた。實に人間が苦痛煩悶の淵に陷て居る時には、彼是と餘地があらう筈がない。彌陀の本願誠におはしまさば、釋尊の說敎虛言なるべからず、佛說まことにおはしまさば、善導の御釋虛言し玉ふべからず、善導の御釋まことならば、法然の仰せ空事ならんや。法然の仰せ眞ならば、親鸞が申す旨又以て空しかるべからず候歟。佛陀の本願から法然上人まて敎は一貫せるなり。法然の敎に會ふて一點の疑を交へず、法然の外に念佛なし、法然上人の仰に一點の私を雜へぬ、此絶對的の信仰から、上人の信仰も我信仰も半に變る處なし。唯一つなりといはれた所以てある。親鸞聖人の信仰に對して法然上人は、信心のかはると申は自力の信に取りての事なり、即智惠格別なるが故に、信又各別なり、他力の信心は善惡の凡夫共に佛の方より賜はる信心なれば、源空が信心も善信房の信心も更に變るべからず、唯一とつなり、我かしこくて信ずるに非ず、信心の變りあふておはしまさん人々は、我が參らん淨土へはよも參り玉はじ、能く〳〵心得らるべき事なりと。これて他力の信仰は如來回向のものであるといふ事か愈明になるてあろうと思ふ。

以上は親鸞聖人か師匠に對せられた絶對の信仰を申したのであるが、又下に對するにも同じ信仰か顯はれて居る。專修

念佛の輩の我弟子、人の弟子といふ相論の候らんこと、もてのほかの仔細なり。親鸞は弟子一人ももたず候。其故は、我がはからひにて、人に念佛を申させ候はゞこそ、弟子にても候はめ、彌陀の御催にあづかりて、念佛申し候人を我が弟子と申事、極めたる荒涼の事なり。自分の話が緣となつて信仰を得たるものがあればとて、それて直ぐ己の弟子なりと、そんな事がいへるか。信仰の事は一點己が計を交へぬのてある。信仰は直ちに如來の賜もの也。して見れば己が信仰も人の信仰も同じ事なり。人も我も皆等しく佛の子てあり又同じ朋友てある。こういふと、聖人は非常な謙遜の樣てあるが、然し謙遜でも何でもない。親鸞聖人が人に對せらるゝ時には、自身のありのまゝを發表せらるゝのてある。故に殊更に謙遜の前置を云ふ必要がない。これ實に聖人の人格の大きい點てある。聖人の言語には謙遜もなければ、又上手もない、然して皆言ひ切てある。成程自分の考へたとを云ふてこそ、謙遜の必要も生ずる。然るに聖人は、己の考た工夫した事をいふのてない、皆如來より賜はれるものを其儘傳へるのみてある。蓮如上人の御文の中には、故聖人(親鸞)の仰には、親鸞は弟子一人ももたずとこそ仰せられ候ひつれ。其故は如來の敎法を十方衆生に說き聞かしむる時は、たゞ如來の御代官を申しつる計なり。更に親鸞めづらしき法をも弘めざるなりと。實にえらい言振てある、こうなると己が味ふた其儘を說くと云ふことは、即ち我は佛の代官を申すのぢやといふことになる。實に何うもえらい言ひ方てある。然しこれてこそ、何百年といふ末の今日まて、何百萬といふ大勢の人々が一度聖人の信仰を聞く時は、同一絶對の信仰に住して、自ら無限の感謝が內心に反響し來るのてある。此信仰が聖人人格の中心となつて居る、此信仰以外には親鸞聖人はないのてある。前に聖人の人格が總てを盡して居るといふたのはこゝてある。そこて前に申した信心のかはりおうてましまさん人々は余が參らん淨土へは、よも參り玉はじといへる法然上人の御言葉は、親鸞聖人の宗旨には重大なるものとなつた。即我信仰は佛より賜はれる絶對の信仰なるか故に、若し自力の念佛を爲す者は余か參らん眞の淨土へは行く事か出來ぬ。それは皆化土の往生ぢやと言ひ切てしまはれた。聖人の人生觀は全く此信仰を中心として無數に書かれたる周圍の集合と見る事か出來る。親鸞聖人は彌陀一佛の中に總ての佛、總ての菩薩、總ての人格を包容して唯此一佛を念せよとすゝめられた。一向一心といはれた所以は、此一彌陀佛を念する外に何もない。本願を信せんには、他の善も要に非ず、念佛にまさるべき善なきか故に、惡をもれそるへからず、彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきか故にと。何事も必要かないのてある。これか絶對的に大い處てある。念佛は無碍の一道なり一佛を念する事は即ち一切佛を念ずる事てあるから唯一彌陀佛によれはそれてよい。親鸞聖人の人生觀は此信仰より出て居るのてあるから悉く如來か中心になつて居る。聖人か常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案すれは、偏へに親鸞一人か爲なりけりと。人生を見れば、苦しき事、樂しき事、善き事、惡しき事、轉々往來繁雜當ならず、進退全く窮する場合かある。其時には直ちに佛を見よ、佛は一視同仁我等の迷を救濟せんか爲に、己

に五劫思惟の本願を成就せられたのである。此大なる如來の御恩、此深き御思召を感したならば、吾等の善い事、惡い事、更に頓着する事はいらぬのである。そこで聖人は、善惡の二つ總して以て存知せざるなり、其故は如來の御心に善しと思召す程に知り通したらは、善きを知りたるにてもあらめ、如來の惡しと思召す程に、知り通したらは惡しさを知りたるにてもあらめと、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、萬の事みなもて、空事たわ事、誠ある事なきに、たゞ念佛のみぞ、まことにておはしますと。我か斗らひは全く抛ちて、如來を中心にせよ、標準にせよと仰せらるゝ。人生は實に紛叫錯雜して居る。釋尊の時代に已に提婆阿闍世の悲劇か演せられた。尚今日も小提婆小阿闍世の悲劇は常に演せられつゝある。然れとも是皆人生に於ける事實である。然しこれには偉大なる敎訓か存して居る事を忘れてならぬ。釋尊の時代に於ける大悲劇は、假令如何なる惡人女人なりとも、廣大なる悲願には決して漏れる氣遣はないといふ一大事實の現示である。和讃には『彌陀釋迦方便して、阿難、目蓮、富樓那、韋提、達多、閻王、頻婆娑維、耆婆、月光、行雨等。大聖各諸共に、凡愚底下の罪人を、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり』。どんな者でも助かる。此大なる佛陀の慈悲を感せらるゝ點になると、聖人の人世觀世界觀といふものか無限に廣くなつて來る。即ち前に廣漠なる一代佛敎も唯信仰の一に縮まるといはれた其信仰より。大なる感謝の情を以て此人生を觀らるゝ時は、總ての經文か悉く聖人の人生觀を表はすものとなり、三經は勿論或は日藏經、月藏經を引きて、日月星辰共に信仰の人を護持するといふて、現生十種の益の中には冥衆護持の益を擧けられてある。實に聖人か信仰以後の生活は悉く感謝の情となつて顯はれて居る。故に聖人の信仰以後の人世觀は此感謝の上に成立して居る。今日此心地よき紅葉の時節に、こうやつて、半日佛の前にありて御話をして居るといふと、自ら精神か爽快になつて、悠然として感謝の念か起る。これには理窟はないが、信仰の經驗のある御方は能く御承知であろう。是迄苦しんで居た人が初めて佛の光に接したる時は何んなであろう。中には漸く身を入るゝへき狹き牢獄の中にありて遂に佛の光に接して粗末なる麥飯でも、是佛の大なる賜なりとて有難く食はれた時の心持は何うてあつたであろう。蓮如上人は新しき衣服を着たる人の肩を、そと御たゝきあつて南無阿彌陀佛なりといひ、又或時は、疊をたゝきて、有難や南無阿彌陀佛の上に座はれる思がするよと申された。親鸞聖人が感謝の情を以て人生を觀らるゝ時には更に邪魔になるものはない。親鸞は愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑し、淺間敷身ながらも、信仰を得て攝取の光に遇ひし上は人生の事は總て皆佛陀の賜なりと思はれたのである。茲に至らなければ眞の感謝の情が起らぬ。若し信仰なくして感謝の情か起るといふ人あらばそれは僞りである。信仰なき感謝といふものはあるへからざる事ぢや。そこで親鸞聖人は何をするのも御恩報謝である。我何があつて人に慈悲か施せるか、人に善根が與へらるるか、我は是現に罪惡生死の凡夫ではないか善根とか慈悲とかいふ事すらも恐入つた事である。唯た佛陀の大なる力あるのみ。此力に乘してこそ、無明長夜の大海も

平穩に航海することを得てやかて彼岸の樂園に達する事が出來るのである。

要するに親鸞聖人の如きは、日蓮上人の如く格別なる角がなく、至極平凡である樣ではあるが、其平凡の如く見ゆるが最大いなる所以であるのである。近頃は秋になりまして、氣も自ら澄み、何となく感謝の情が湧き來るのでありますが。感謝は獨り樂しきのみに起るに非ず、悲しき時にも、苦しき時にも、起らねばなりませぬ。夫故に和讃には、如來大悲の恩德は身を粉にしても報ずべし、師主智識の恩德も、骨をくだきても謝すべしと。今日所々に報恩講の營まるゝのも全く此情から來るのであります。

(記者曰く、右の講話は社說と重複の嫌あれども、平易にして一讀誰にも分り易きを以て、かされて茲に掲ぐることとしぬ。)

* * * * * *

修養座話

加藤玄智

今日私が佛敎青年會の此席で御話仕樣と思ます事は「イマヂンシー」Immanency と云ふことであります。まだ耳新らしい方も澤山おいでゝあらうと思ひますが、世間では之を內存とか或は含蓄とか云ふ言葉を以て譯してをりますが、私は之を佛敎上の言葉を以て飜譯して相卽と譯さうと思ふのであります。それで「イマネンシー」と云ふのは名詞でありて之を形容詞にすれば、イマネント Immanent であります。而して「イマヂント」と云ふことは相卽的と譯します。世間では內存的とか或は含蓄的とか申してをりますが、私は之を相卽的と云ふ風に譯さうと思ひます。そこで「イマネンシー」又は「イマネント」といふことは何ういふことであるかと申すと、いろ〳〵な場合に使はれるのでありますが、世界觀、人生觀といふ樣な方面に於ては畢竟左の如き意味があろうと思ひます。

御承知の通り此世界は一方から見るならは現象界であつて、他の方面から觀るならば本体界であります。例へば西洋の宗敎の敎へる樣に此世界は神が造つたのであると斯う考へてみますと、神は世界の本体であつて世界は神から造られた現象界であると斯ういふことに成るのでありますが、此場合に於て丸て世界とかけ離れた神が世界を造つたといふことになるのでありますから、神と人間とは自然二つのものであつて其間がかけ離れてをるといはなければならむのであります。從て此場合に於ては神と世界との關係は「イマネント」でなくてトランセンデント Transcendent であります。即ちトランセンデントと云ふことは超絕的とか或は過超的とか譯す字でありますから、神は此世界を超絕して居る、本体は現象以上の境界であると云ふほどの意味であります。然るに相卽的と申すのは丁度此過境的の正反對であつて本体と現象を斯くの如く二つに別けて考へないのであります。過境的と云ふ考方でありますと本体と現象とは天地雲泥の差があり、氷炭相反したものであると云ふ風に說くのでありますけれども、相卽的と云ふ上からの考へ方に於きましては斯樣に現象と本体との間を峻別しないのであります。即ち同一物も一方から云ふならば現象であるけれどもそれを他の方面から見るならば其現象が直に本体であると斯ういふ風にいふのでありま

す。佛敎家は能く引く例であります。本体と現象は恰水と波との如き關係である。本体は水であつて現象は波である。本体は同一の水であるが現象となると云ふと、千浪萬波雌波雄波に分れてをります、併しながら千浪萬波となり雌波雄波と分れをる現象差別の境界も畢竟同一の本体絶對に離れて存在して居るのではない。波即ち水、水即ち波、水と波とは互に相即してをると、斯ら佛敎家は申すのであります。即ち相即的と云ふ意味は斯くの如き意味であつて現象ど本体とキチンと離して二のものとして見るのではなく、此二は達觀すれば同一物であると考へるのであります。同一現象も其裏面には實在の意味を具へてをる、それは恰も千浪萬波と別れ雌波雄波と別れをるも一朝其波が靜まつた有樣を考へてみるならば、同一の水即ち滿然たる水体に歸するのであつて從て波即水、水即波、波と水とは互に相即的の關係を存してをる。水は即ち波、波は即ち水であつて而も、水波の間法爾自然として自から差別相を存してをると見るが、即ち「イマネンシー」の考へ方であります。

デ基督敎特に猶太敎一流の思想は何ちらかといふならば、前に申した超絶的過境的の思想でありまして、佛敎の思想は徹頭徹尾相即的な考へ方であるのであります。之は弘法大師が即而事眞と云ふ語を用られ、或は一般に佛敎家が之を稱して一色一香無非中道と申して居る。或は又草木國土悉皆成佛とも申すのであります。又衆生本來成佛、又は父母所生身即證大覺位と申します。又まう少し和らげて申せば悟れば佛であるし、迷へば凡夫である、凡夫も悟れば佛なり、佛も迷へば凡夫なりといふことになるのであります。又之を佛凡一体、凡聖齊圓とも申してをるのであります。一方から云ふならば吾人は凡夫である現象界に彷徨して居るものであるけれども、翻て考へてみるならば現象と本体と素と二ッのもので無いのであつて同一物の表裏二面と云ふべきものでありますからして凡夫も實は神や佛の實相を具へてをる。然し現象界の森羅萬象は其儘實在界の眞相であるといふ事になるのであります。此理を大觀してみるならば佛敎家の申す通り、「咲く花もちるもみち葉ももろともにおのづからなる法の道かな」と云ふことになるのであります。是れ則ち法爾自然の相であります。春は花夏郭公、秋は月、冬雪ふりて涼しかりけり」と云ふのも法爾自然の意味で、現象界に相即した實在界の風光を詠した歌であります。此立脚地に立ちて安心立命をするのは（佛敎で言ふならば）佛敎の聖道門と云ふ敎は皆之れであつて、聖道門自力の敎は此立脚地に立ちて安心立命するのであります。然るに此「イマネンシー」の考に住して安心立命の究竟地に到達した哲學者が西洋の近世に於てあるのであります。それは別の人でもない御承知の通り有名なスピノザであります。此人は西洋では基督敎の繁昌な時分に出たので、彼は猶太人で一時は猶太敎會に這入てをつたにも拘らず、其思想は全く佛敎の思想と同一であつて「イマネンシー」の考に住してをつたのであります。前申した通り佛敎の立脚地からいへば宇宙即ち神、神即ち宇宙と斯ら云ふことに過ぎないのでありますが、スピノーザは其見解に体達してをつたのであります。前の言葉で以て言ふて見るならば現象即本体現象即實在の理

を信して居つたのであります。而して此考を確く取つて動かなかつた爲めに彼は遂に自分の屬していた猶太敎會からも破門されて仕舞ましたが、氏の一生は極貧しい生活をして暮されたのであります。

併しながらスピノーザの思想と云ふものは非常に確固である、其信仰と云ふものは非常に鞏固でありまして大山が前に崩れても、洪河が後ろに決しても自若として少しも頓着せぬ、自分の命をとるものがあつても自分の信仰は斷然として捨てない。或時は猶太敎の人がスピノーザが若し公けに「イマネンシー」の思想をふり廻はさないならば、幾等か金を遣つて安樂な生活を享樂させやうといろ〳〵申したけれども、彼は自己思想の獨立を尊び自己の信仰を重じましたから斷然として金を受けるのを辭退致したのであります。彼は又自己の信仰を非常に重じ尊ぶ事の大なる、當時「ハイデルベルヒ」の大學は彼を敎授の職として禮を厚うして招ぎましたのでありますが、スピノーザは固く辭して行かなかつたのであります。其譯は若しスピノーザが大學敎授の職につきましたときは自分の生計の上には安樂を得ますが、當時の大學と云ふものは未だなか〳〵基督の思想が蔓衍して容易に信仰の自由を得ませむのでありました。從て自己の信仰に危害を與へる樣な恐れがありましたからして、そこてスピノーザは斷乎として此名譽ある大學敎授の職につく事を固辭したのであります。而も彼は家に儲石の儲も無いのでありますからして、日々の食物に困ると云ふ樣な境遇でありましたが爲めに、一生硝子磨きの仕事をして靜かに自己の生計を營むでをつたのでありま

す。氏が其清貧に安じ其信仰の厚く道の爲めに一身を犧牲にして顧みなかつたと云ふことは、丁度顏回が一簞食、一瓢飲、在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一、賢哉回也と孔子が讃嘆されたと同じ至境に住して安心立命して居つたのであります。硝子磨きの職と云へば如何にも賤職であつて愍な日雇人足の如きものでありますけれども、彼は其境界に安じて止住してをつたのであります。スピノーザの此信仰と此滿足と云ふものは何所から來たかと斯う訊ねてみますと全く「イマネンシー」の考へから發つていふのであつて、スピノーザが如何に哀れな生活をしてもどんな家に住んでをつても、陋巷に在つて儕石の儲の無いのに尙彼れが甘じて安心立命をして居つたといふのは全く「イマネンシー」の考の然らしむる所であつて、成程現象からもいへばこそ穢い貧乏な生活でありませう、賤い其日稼ぎの職人でありませうけれども、若し裡面から之を觀察したならばどうであるか、何ういふ風になるであらうかと申せば、現象即本体であつて汚い所の現象も其裏に立ちて高い位地から之を眺めみるならば、こは眞に實在の境遇である、神のうちに棲息し神の榮にのうちに饒かに生活してをるものであると斯ういふ考になるのであります。それであるからスピノーサは成程通俗の見解を以て是をいふて見たならば如何にも哀な生活である、九尺二間の裏長屋に住むでをる貧乏人である。併し之は俗人の見解であつて至人達者の眼光から見るならば、其汚い九尺二間の裏長屋が即ち神の榮光を以て滿たされてをる所の立派な大厦高樓である。天國である。樂土である、と云ふ事になるのであります。此見

解に住したならば通俗の見解と至人達者の見解とは全く正反對であつて、賢人の世は常人の夜であると云ふことになるのであります。總ての現象界をみるのに實在界の光を以てみる事になるのでありまして、スピノーザの語を以て云へばスブスペシー、エテルニタチス sub specie aeternitatis と申すのは則ち此の消息を傳へたのであります。此は丁度スピノーザの考が佛敎思想と全く一致した點であつて東坡も亦この見解に住して安心立命をしてをりました。

御承知の通り東坡は大變禪學に達した人であつて、禪宗に因て安心立命した人である。それであるから東坡も現象即實在、宇宙即ち神と云ふ所の見解に住してをつたのでありますからして、スピノーザの「スブ、スペシー、エテルニターチス」と云ふ考のもとに宇宙萬有をみてをるので東坡は之を詩的に諷詠して歌ふています。谿聲便是廣長舌、山色無非淸淨身と斯う申してをります。即ちザワ〳〵と流れてゆく所の谷川の音も單に現象界ばかり眺めてみたならば、水素と酸素と化合した水の流れに過ぎないのでありますが、至人達者の眼中からは是をみるならばそれが即ち佛の廣長舌の說法と聞ゐるのであるし、巍々として聳へてをる所の山の景色も直ちに金色の佛身と考へられて來てその妙味は到底冷煖自知したものでなければ味はれないのでありますからして、東坡も前に申した詩句のつぎに斯う云ふ句を加へてをるのであります。夜來八萬四千偈、如何他日擧示人と、斯う申してをります。其境界たるや遂に唯佛與佛の知見であつて自から其境界に到達したものでなければ到底云ふ事の出來ない境界であります。又東坡は此境界を稱して物の中に居ないで物の外に遊ぶと申してをるのであります。物の中にをらむ即ち事物に拘泥しないで事物の外に超然として立ち優遊自適してをると云ふ意味であります。然るに常人はどうでありませうか、常人は一事一物に拘泥する一事一物に屈托ずる所からして非常に忌々しい事が澤山に發つてくる。或は金が慾しとか、或は家屋が慾しとか或は土地を所有したいとかいふ樣な、いろ〳〵な屈托が其所に生じてくるのであります。さうして其結果は相當な方法にてそれを所有する事になれば、差支ないのでありますけれども非常手段を行ふても取らふといふ考を發してくる、そこで遂には忌はしい敎科書事件と云ふ樣なことをも世間に暴露する樣になるのであります。是れ其物の中に住つて物の外に超然とする餘裕がないからである。所謂事物に屈托し事物に執着する所からしてさういふ結果となつてまいるのであります。然るに若し眼光を一轉して事物の中に自分の身を措かず事物の外に超然として立つて眺めてみたならばどうでありませうか、其事物に對する所の吾人の眼光は非常に變つて來やうと云ふのであります。こゝが信念の非常に必要な所であります。もしも若し自分の立場を物の中に置いてみるならば、吾人はいつまで立つても安心は出來ないのであります。何所まで往つても、欲しいとか吾しいとかいふ念は止まむのであります。日本でいへば三井とか岩崎とかいふ樣な富豪に成つても尙是れてよいといふ譯にはゆかぬのであつて、尙更欲しい、吾しいといふ考へは寧ろ增長してくる。昔の人が能く申した通り灰吹と金持は溜る程ときたないものであります。之は全く物

の中に身をおいて考へますれば然うなるのであつて、三井岩崎抔の財產家になつても決してまう之れてよいと云ふ安心の境界に達したとはいへなかろうと思ふ。又西洋でいへばカーネギーとかロスチャイドとか云ふ樣な資產家に成つても矢張同じ事でもう是て充分だといふ所の限界は少しもなかろうと思ふ。何所までも欲しいとか、吾しいとかいふ所の心は終始一日も止む時はなかろうと思ふのであります。然るに一度信仰の立脚地に立ちて之を考へたならばどうでありませうか、既に述た通り顏回は一簞食、一瓢飮、陋巷に在りて自ら淸貧に甘じて少しも之を苦しまず安心立命をしてをつたのであります。

既に申しました如く、スピノーザ彼はハイデルベルヒの大學敎授の名譽もすてゝ、硝子磨きの賤職に止まる事を以て甘んじてをつたのではありませんか。僥倖の儲のない顏回や硝子磨きのスピノーザなどは孰れ三井岩崎、カーネギーやロスチャイルドに勝てをるとはいへません。而も彼等の信仰の生命は三井岩崎、カーネギー或はロスチャイルド等の眞似も出來ぬ所の境界に安住してをつたのであります。東波の所謂物の中にいないで物の外に優遊自適してをつたといはなければなりませむ。ロスチャイルドや岩崎三井を始とし紛々たる俗世界の生活を營んで居る所のものは皆物の中に這入てをる、さうして物の外に遊ぶことを知らないからして、永久欲しい吾しいといふ所の不滿足のうちに彷徨してをるのである。即ちショーペンハウエルの言葉でいへば何處まで行つても生きんと欲する意志 Wille zum Leben は斷滅する事が出來ないのである。佛敎の言葉でいへば煩惱は何所までいつても着き纏ふて居ることになる。併しながら物中に遊ばず別の言葉でいふてみるならば現象界にのみ棲息してをらむて、現象界以上の本体即ち實在の世界がある事を知り、現象界の生活中に自から實在即ち神の榮光があらはれてをる。現象界ばかりが世界の全体ではなくして現象界以上に尙一層高い意味をもつた所の實在界の生活がある。吾人は現象界に住んでは居ながら實在界の生活を味はへるのである。斯ういふ事を知ることが出來たならば最早其人は物の中にあつても現象界に拘泥せず、自から現象以上に超然として眞人の至境に体達することの出來た人といはなければならむのであります。

スピノーザ又は顏回の如きは實に私の前申し述べた人物の一人であつたであろうと思ふ。玆が實に信仰の必要な所であつて一度び此信念に住したならば、其れに因て生ずる所の歡喜は果して幾何でありませうか、到底俗人の知り及ばざる所であろうと思ひます。宗敎家は之を稱して神の榮光のうちに生活すると云ひ、或ひ攝政の光明中に住すとも申して居るのであります。かくなれば佛の光に接し神の光明に依て宇宙萬象をみることが出來るのでありますからして、人一度び此位置に上つてそれから更に神の光、佛の光明に依て飜て宇宙萬象をみたならば、此有樣は通俗のみる處とは全然一變して仕舞はなければならぬのである。此信念あつて始めて現象界の生活が意味をもち、現象界の生活が確固たる根底を得てくる事であろうと思ひます。それは獨り顏回やスピノーザや東波のみではないのであつて、古來の聖賢といはれてをる所のも

のは皆斯くの如き信念に住して、而して始めて彼れが如き大事業を經營し、彼れが如き精神的の生活を送る事が出來たのである。耶蘇が若し信仰さへあつたならば此山に向つて彼方に往けと命すとも山は必ず向へ行くと斯う云ふ事を申したのも、全く此邊の消息を傳つたものであつて、自己の確固たる信念に依て事業を經營して行くならば何事もならぬ所のものはない。偉大なる信念をもちて事業に當り己は佛なり、神なりの中に生活してゐると斯ういふ考を以て事業に從事したならば事業は非常に力を得、人は自ら威嚴を得、例之ば山に向て斯うせよと命しても山も必ずその命令を遵奉するといふ位なことになるのであります。又釋尊は初めに眞理を見開き成道されて非常なる安心立命の至境に到達された。其時に如何にも廣大なる滿足を得、廣大なる安慰を得、歡喜の果位に止住せられた狀態を形容して因果經の中に斯う云ふ樣に說かれてをります。

三毒五慾境　永斷無餘習　如蓮花在水
不染濁水泥　自悟八正道　無師無等侶
今得成正覺　堪爲天人師　身口意滿足
故號爲牟尼　（中略）　諸天及世人
所歡於五慾　比我禪定樂　不可爲譬喩

で耶蘇なり、釋尊なりかゝる大信念をもち大確信を有してをられましたから、そこで彼の如き大事業を成就する事が出來たのであります。此信念の發する所耶蘇は博愛の行となり、釋尊は慈悲の實踐と成つたのであります。此信念あつた爲に耶蘇は一身をあげて斯敎に殉することが出來、釋尊は耶蘇と違つて非常に平和な一生を送られたのであるけれど、其感化の及ぶ所はその生前既に恒河の畔に洽く、其死後に於ても佛敎の感化は支那日本に傳はつて非常な勢力を有して居るといふのは全く敎祖の信仰の力であるといはなければなりませんので。してゐの信仰と云ふは決して別のものではない、スピノーザの言葉で言ふて見るならば「イマヂンシー」の考に歸するのであつて、通俗の見解を以てみるならば現象界に齷齪拘泥せんければならむのでありますけれども、其現象界のうちにあつて自から實在界の風光を想見し、實在界のうちに優遊すると云ふ精神の大根抵を得た結果、彼れか如き博愛慈悲の大事業を決行することが出來たのであります。既に俗事の世界である所の現象界のうちにありながら實は實在界と全く離れて居ない神のうちに住してをる。現象も即ち實在で自然界も人生も元實在即ち神を離れて居ないとかう云ふ見解に住したならば、現象界の事は即ち實在界の事であつて、現象界の事も決して蔑視すべきものではない。吾人の日常の行は即ち神の行、佛の行である。君に忠を盡し親に孝を盡し、學生が學校の規則に隨順し、敎師か自己の職務に忠實にすると云ふ、一擧一動が即ち佛の掟に從つた行爲である、道德は即ち神の法律である。換言すたばモーラルローはヂワイン、ローであるといふことになるのであります。此に至つて道德と宗敎とは遂に一致するといはなければならむのである。世間の道德は宗敎の根抵を得て初めて其深遠なる意味がでてくるのであります。此立脚地に在つて道德を解釋すれば利己論者や、進化論者の如きもの、到底解し得ざる處の深遠な意味を道德に認

むることができるのであります。道德といふも畢竟此點まで行かなくつくて何等の効果もない事であります。其點に住して始めて眞の道德と成り立つのである。言ひ換ゆれば道德は其根抵を確固たる宗敎に求め、倫理は其根抵を信仰に得て始めて完全なる好果を奏する事が出來るのであります。

既に現象即實在であつて吾人は一擧一動行住座臥共に佛の光の中に生活して往く以上は、現象界の事柄は皆其裡面には實在界の意味をもつてをり、實在と現象とは相即して行はれて行くのであるから吾人は無暗な事をしてはならむのである。人が此世に居り現象界に住して居る間は朝夕の些事でも極めて忠實に極めて眞面目に遂行せむければならぬのである。何となれば現象は畢竟實在をはなれて存じてをるのではないからして、現象界の一擧一動一言一行は皆實在界の出來事であつて、人間のやつてをる事と思ふと非常な間違であつてこれは實は佛のうちに行はれてをる所の出來事である。人間業でやつてをるのではなくつて佛の攝理に依て吾々が一擧一動一言一行やつて往くのであると斯う見てこんければならむのである。是佛敎家が治生產業皆實相と申した所以であります。大工が板一枚削るのも左官が雪隱の壁を塗るのも車夫が汗水たらして勞動するのも皆是れ實在中の生活である。本体に即した現象界中の生活である神の榮光中の生活である佛の光明中に攝取せられた上の生活であると、斯ういふ風に考へてみなければならむのである。若し一朝かゝる信念に住したならば何事をするにも學ぶにも眞面目になつてくるし又なつてこなければならむのである。否さうせずにはをられむのである、我を欺いて行くやうな事はしやうと思ふても出來ないことになつてくるのである。何となればそは極く詰らない樣な事柄も非常に深遠の意味を以て、實在のうちに消長起伏する所の出來事であると斯うみてくるからの事であります。是れ耶蘇が一羽の雀は錢一文か二文で得られるけれども、其一羽の雀と雖も神の御心によらざれば地に落つる事はないと云はれた所以である。耶蘇が野に咲いて居る所の一片の百合の花を把つて見ても尙ほ其中に神の榮光を宿し神の光がかゞやいてをるのであつて、ソロモンの榮華も野生の百合の花には及ばないものかあると云はれた所以であります。若し敎育家の如きも一度び此の見地に住する事が出來たであろうならば、朝夕村のワンパク小僧に接し「いろは」を敎へるも非常な意味を生してくるのであつて、決して疎略には出來ない事になるのである。成程尋常師範學校でも卒業した立派な敎育家が、村のヤンチャン小僧を相手に「いろは」を敎ると云ふ事は、如何にも一方からみれば愚の極の如くみへる。然しなから其「いろは」を敎へるのが自から實在の法則にかない、神の榮光中の出來事である、名譽な仕事である、朝夕佛事に從事してをるのである。實在界の意味をもつた仕事であると斯う考へてみたならば、決して如何なる些事と雖も等閑に附することは出來ないのである。何となれば是等の極卑近な事業も、皆實在界の深い意義を有し、深い意味を以てをるからの事であります。今若し此信念に到達したならば理想（目的）と手段の區別はつかぬ事になり、目的と手段とは二にして其實二ではない。目的即ち手段であつて目的と手段とは全く合体

することになつてくるので、一舉一動坐作進退皆着々其理想を實現してをる行爲である。教育家が小學校で小さな子供を教へるといふ事は更に大なる理想に勵進する手段であると同時に、これは又直に理想其ものであるといふことになつてくる。世間には往々教育家は自己の位地を踏臺にして或は會社員になるとか、或は官吏になるとかいふ樣な事を一向希ひ教育家といふ位置は直に其踏臺たるに過ぎない自己の立身出世をする道具である。小學校教員の免狀を得るといふ事は他日社會に立つて華々しい生活をするホンの階梯に過ぎないと云ふやうに考へてをる人もある。然しこれはまだ「イマネンシー」の事に思ひ到らない極めて通俗の見解であり俗見と云はなければならむのであります。教育家諸君にして若し自己のやつてをる所の一言一行は神の榮光、佛の光明中の生活である。實在が一歩一歩に實現されつゝあるといふ思に住したならば、最早自己のやつてをる事は單に俗世界の名譽を博し、將來華美な生活をする踏臺にすぎないと云ふ陋見は眞に採るに足らむ俗見であつて、さういふ陋見は一切ふりすてゝ仕舞はなければならむといふことを悟る事が出來るであろうと思ひます。

孔子は不レ在二其位一、不レ謀二其政一と云はれ、曾子は君子思不出其位といふことをいはれましたが、是又如上の意味を言あらはしたものであつて、苟も士君子たるものは自分の取つて居る所の位地に鑑み、自分の從事してをる所の事業に鑑み、この事業に充分適切に十分忠實に爲るといふことを期さなければならむのであります。何となれば既に述べた通り自分の從事してをる事業といふものは實在そのものゝ眞相であつて、佛の理想を一歩一歩に實現し極めて深い意味を以てをるからの事である。孔子は哲學上の議論をさけられたから其深い所までは云はれなかつたのであるが、孔子は吾人の日常の行爲を律する法則として不在其位、不謀其政と云はれ、曾子は君子思不出其位と云ふことを教へられたのであります。耶蘇は之れと同じことを違つた言葉で云つてをる、即ち斯ういはれてをります。汝等明日の事を思ひわづらう勿れ、明日は明日のことを思ひわづらへ一日の苦勞は一日にて足れり（馬太傳）から教へられた。釋尊も亦是れと同じ事を吾人に教へられてをる。則ち愼莫レ念二過去一、亦勿レ願二未來一、過去事既滅、未來復未至、現在所有法、彼亦當爲思（中阿含經）と斯ういふ事を言はれてをります。是れ實に曾子が君子は思ふ所その位を出ずといはれたのと全く同一に歸するのであります。

所か日本人は私の考へる所に據れば此考が非常に足らないと思ふ。人の視てをる處では勉強してをる樣な風をしてをるけれども、人の見て居ない處では全くなまけて仕舞と云ふ習慣が日本人にはある樣にありますが、それは非常にわるいことである。それであるから卑近な例でありますが、大工を傭ふて仕事をさせるにも其所の家の主人が始終監督をしてをらなければいけないのである。是は何人も實見する所でありませう。そこで受負と云ふことがあるから受負にさせると大工を直接に傭ふたよりは仕事は早く仕上がる、所が釘を三本打つ所を一本にして手をぬいて仕事をする、總てがうういふ風

である。これは獨り大工ばかりではない、かういふ考をするのが日本人の從來の風習になつてをるのであります。之は實に不都合な事である。孔子は君子不レ愧二屋漏一といふことを誡められ、或は又君子は獨りを愼むとも云はれましたが、前の大工の例の如きは全く此正反對で、其不都合たるや申迄もない事であります。

所が今先程からお話した「イマネンシー」の立脚地に立ち歸て一つ考へたらどうでありませうか。大工の手間を偸むも受負仕事の狡猾なのも、其れは金を得ると云ふ目的の爲め手段ではなくて其仕事自からが既に宇宙人生の發達を助け、社會進化の階級を進めて行く處の一の事業である。實在の化育發展を一歩々々に進める處の事業であると斯ういふ事を思ふ事ができたならば、其事業がいかに卑近な仕事であつても實に重大な事業であつて其報酬を得やうといふことのみの手段に止らないで、其手段が即ち又直に理想目的であると斯ういふ具合になりますからして、一刻一刹那も其事業を荒廢してをく譯にはゆかぬ。人が見ているからといふて又監督がないからといふて其事業を荒廢させると云ふ事は決して出來ないのであります。又更に轉て事實の上から之を考へてみましても、斯ういふ風では迚も自己の利益を期し、文明社會に於て適者生存の場裡に角逐して己れ自ら優者となつて勝利を全世界に占める事は出來ないのである。大工を一人雇ふとも其家の主人が一々監督をしてやらなければならむといふ風でありましては、主人は大工を一人雇ふた爲めに貴重な光陰を徒消せねばならむのであるから、最早大工を雇ふ事を出來る丈け見合すことになり、成る可く大工の手をからむことにするから、さういふ不正直な大工は遂に食ふことも出來なくなつてしまうのでつまりは自分の損になる。然るに若し假りに其大工が非常に忠實な大工であつて主人の視ない所でも見てをると同じ樣に仕事を精出したとすれば、どうでありませうか、主人は其監督の時間を省て更に他に有益な事業をやる事が出來ます。さうすれば其大工は常に雇はれる事になり、その結果大變自分の德になる。獨りそれのみではない、若しそうなれば世界全体の事業上からは大工が其業務を忠實にやつて世界の上に一つの貢献をなすと同時に、主人自からも監督の時間を省けるからして他の事業をやつて世界に貢献することが出來るやうになり、同一の時間で大工と主人との二つのものが働く事になります、それであるから大工が忠實に仕事をし、強て主人に監督をさせない事にするとなつたならば、其國民全体に及ぼし得る所の利益は非常に增してくるものと解さなければならんと思ふ。之がつもりつもれば其國民は強大なる國民となり、敏捷なる國民となり、其結果世界に立つて優勝劣敗の天則上優者の位置に立つと云ふ結果を來たすであろうと思ひます。

今日歐米諸國におきましてはさういふ點は中々能く發達してをる。人は皆自分の務を忠實に盡すといふ風に成つてをるのであります。これは今日歐米諸國が富强の位置に立つた大原因であろうと私は考へる。日本人も自然將來東洋の英國となり世界の列强と肩を併べて進んで行かうと思へば、どうしてもこの點を改良しなければならむと思ひます。併しながら、

私の考を以て見ました所では人をして此位置に住せしむるには、彼の進化主義の倫理とか或は功利主義の道德論では迚も行かないと思ひます。又日本人をして秩序あり次第ある所の一大文明的の國民たらしめんとする處の根底は、その根底深い處にある道德を以てするといふてもよろしい。其深い處の根底になる處の確固たる信念即ち宗敎を以てするといふても宜しいが、これは功利主義や進化主義の道德說では到底效果を奏する事はむつかしかろうと思ふ。最も一層高い實在の根底を有してをる處の一大確信、一大道德主義を以てせむければならむと考へるのであります。「イマネンシー」の眞理なることが分かり、治生產業皆實相といふ事が眞に味はれたならば大工にせよ、左官にせよ、敎育者自己のする處の事業は皆實在の發現を一歩一歩に進めつゝある處の深遠なる事業であるといふ事を知る事が出來るのであります。他人から注意せられずとも各自進んで歡て自己の職を忠實に盡すと云ふことになるのであろうと思ひます。敎育者に就を云ふならば決して今日の如く唯敎育家の位地を他日社會に出る立身出世の梯子段とせず、敎育そのものが手段にあらずして目的である。理想であると云ふ事を第一に證悟する事が出來るであろうと思ふ、さうなれば實に敎育者の考は次第に高くなり、而して其敎育者から養成される兒童は知らず〳〵其感化に沐浴するといふ樣になり、兒童の德化と云ふものは風の草に加はふが如く、期せずして其偉大なる効果を博する事が出來るのであります。斯くの如く自己の修養を積んで始めて敎育者は敎育者たる處の看板に耻ぢない處の位置に達すると思ふ。

又今日の中學校の學生は自分達の習つてをる學科は唯將來大學などへ進む處の一階梯に過ぎない、それでどんな遣方でしても早く中學校を卒業し免狀を取り、履歷を取れば之れでよい。唯味く定期の試驗さへ通過して卒業證書さへ握ればよい、成るべく早く卒業免狀を得、成べく落第させない學校に這入たい出來る事なら卒業免狀でも賣てくれる學校でもあつたならば宜かろうと、斯ういふ考を持つてをる。是れ實に普通の人間の眼光からみても理想の卑いのを嘆息せざるを得ないのでありますが、斯くの如き考へと云ふものは全くは中學敎育を以て唯一の手段踏臺たるに過ぎないとする考でやつてをるからのとであつて甚だ徹底せぬ考である。中學敎育は無論一方では高等學校迄の踏臺に過ぎないのでありませうけれども「イマネンシー」の考を以てみるならば中等敎育は手段たると同時に又目的其ものである。何となれば中等敎育と云ふ事も實在の生々進化を輔けつゝある所の出來事であつて中等敎育自からが何等の意味を持つて居ない所のものではない。現象即實在、實在即現象である以上は如何なる事業と雖も皆實在の意義を有してをるのである。中等敎育其ものもそれ自からに於て深遠なる意味を有してをるのである、中等敎育は獨り高等學校や大學までの豫備のみではない中等敎育を唯豫備とのみ見るのが過ちであつて中等敎育は獨り手段目的ではない。それは其れ自から目的であり、それ自ら實在の生々發達に向ひて一刻一刹那に勵進して行く處の事業である。是れ畢竟現象は即ち實在であり、現象は決して實在の眞相を離れむからの事であります。宗敎的に之をいつてみるならば中等敎育

の如きも亦佛の光の中に行はれてをる所の事柄である、生徒が中學校で以て敎をうけると云ふことが即ち盡十方無碍の光明中に行はれてをる事柄であると、斯ういふ風に考へますのは治生產業皆實相といふ立脚地であつて、人は此に達せんければならぬのであります。若し一度び此考に住したならば前に言ひました通り自分の位置自分の現在の事業等が中々大切な事であつて、人はこれ以上に希望し其れ以上の事に迄心を惱ず餘裕はないのであります。

彼の華嚴の瀧に身を投した少年哲學者の名を博した藤村操の如き現在高等學校の生徒でありながら、自己の本分を忘却したから彼の如き悲慘なる最後を遂げたのであります。何故なれば彼は元と高等學校の生徒であつて高等學校一部の學科と云ふものは外國語の力も不十分で迚も人生とか宇宙とかいふ樣な深い哲學上の事を知ることは出來んのである。然るに宇宙人生の事は到底不可解であるといつて、華嚴の瀧に身を投して自殺するなどは、君子は思ふ所其位を出でずと云ふ眞理を知らないものと云はなければならむのである。然るに彼は思ひ是に到らずして彼の管見より宇宙人生が不可解と叫んで身を殺すに至つたのは甚だ淺慮と云はなければなりません。彼にして若し自己を知れ Know thyself の訓誡をだに服膺してをつたならば、あゝ云ふ悲慘な最期は遂げなかつたのであるのみならず。彼れの死後續々一般の青年は彼れの風を望みて或は淺間山、或は華嚴の瀧に赴きて自殺せむとするもの二三にして尙足らずといふ樣な惡結果を社會に及ぼすとはなかつたであらふ。自分の考に由ればひとり彼をして自殺を思ひ止らしめたのみならず、尙進んで社會にも惡結果を及ぼさないで行く方法は唯一つあるです。これは彼がスピノーザが淸貧に安んじ一生涯硝子磨きをして暮して安心立命の位置に住してをつたと、同じ樣に藤村は高等學校學生と云ふ自己の位地を以て安心立命してをつたならばあゝ云ふ慘事は出來なかつたろうと思ひます、此は非常に大切な點であつて、吾人は現象に即して實在を認め一度び「イマネンシー」の考に住することが出來たなれば思はざる不測の過ちに陷る事を未然に拒ぐ事が出來ると思ふのであります。眞に親鸞聖人の所謂、煩惱障ヒ眼雖不見、大悲無ヒ倦常照ヒ我であつて、保羅が言ました如く、我は神の中に生き神の中に動き又神の中に在る者であると斯ういふ考に住するとが出來たならば、其神のうちに生活してをる所の吾人は徒らに自己の職業を荒廢し又自己の一身を徒らに自殺などして滅亡に歸することは出來ないのであります。却りて保羅の言いました如く、人は千辛萬苦如何なる艱難に出會ても尙神の力を借りて奮勵し、神の光に導かれて勵進し艱難辛苦を侵して努力してゆくうちに練達を生じ練達よりして希望が發つてくる、希望が發つてくれば自ら安心も出來、大安慰、大歡喜の至境に到達する事が出來樣と思ひます。

私は今私の話を了はるに當りまして佛敎家の眞の「イマネンシー」の信仰に住して、其立脚地に安心立命した著明なる一のお話をして置かうと思ひます。それは外の人ではありませんが、彼の甲斐の國の慧林寺に居られました快川國師であります。快川國師は言ふ迄もなく禪宗の名僧でありましたが、彼れは武田氏の知る處となつてその保護をうけたのであります

が、遂に信長の憎む處となり、信長は軍を起して武田氏を亡しましたとき、慧林寺へも攻入つた。其時に快川國師は山門に閉ぢ籠りまして兵火山門にいたるに及び、尙泰然自若として炎々たる火焔の中にあつても少しも神色を動かさず、偈を說いて安禪不必山水、滅却心頭火自涼と大喝せられ、煩惱即菩提、生死即涅槃の立脚地に住して遂に死につかれたのてある。それは全く「イマネンシー」の考へに住した上より來た安心立命と言はなければならむのてあります。實に快川國師の言はれた火も亦涼しと云ふ處に非常な妙味のあるのてありまして眞に「イマネンシー」の地位に悟入したものてなければ此境界に止住する譯には行かないのてあります。前に述べました通り春は花夏郭公秋は月、冬雪ふりて涼しかりけり、と云ふ此涼しかけりといふのが中々悟れぬ處て、而も此境界を以て目的理想として自己の一言一行を律して行き、之を以てその根本となし以て修養を積まば頗る得る所があろうと思ひます。依て聊か「イマネンシー」の說をなして暫く諸君の淸聽を瀆した譯てあります。

未震法雷

一僧あり、木山より特派せられ、遠北の各軍を悉く巡防し、南下して此處に至り各隊を一々慰問す其の精力嘆服するに足る。予を見て一辭を需む、即ち特に千頭庸哉氏に囑して其の携てる僧冠を畫がしめ、予上に題して曰く、

震法雷、擊法鼓、布慈雲、洒三千雨、

。惜い哉、此僧精力餘ありて、修養未だ足らず、彈丸の落下するを見て、頓に前進する能はず、一將校見て笑て曰く、不能震法雷と改めては如何と予曰ふ、此くては過酷なり、未震法雷と改むべしと、聽く者爲めに哄然たり。（朔川）

同一鹹味

無題錄

鈴木卓苗

◎

口は禍の門なることを思ふては終日口を閉ぢむと欲することとあり、長者の傍に坐してその廣長舌に耳を澄まし、心を醉はしむる時を顧みては、我口舌の甚だ拙きを悔ゆるの情に堪へざるなり、あゝこの口禍の門が、この口實の船が、之を如何にすべきや。

吾之を實用と技術とに考へて自ら惑を解かむなり、

口が言語の用をなすの始めや、自らの思想を以て他に移し、隣に傳へむと欲するに動機せしならむ、されば我に思ふ所あれば口を開いて喃々し、我用已に足るや之を閉ぢて又他を顧みるなからむとするも、何の妨も之れあらざるなり、故に人の語默は每に其口の開閉と相終始し、苟も我に傳ふべきあるものなくんば口は開かるゝことなくしてその用を充てむとす。口の用はこゝに終るべきか、しかるべからず、人間の居住が素朴なる實用の境を超えて遙に美術の莊麗に入り、敎會の會堂が其實用的意義を捨てゝ崇大なる殿堂伽藍の域に躍りすゝめるが如く、口舌の用も亦今や其實用地を抽んでゝ技術にまで進みゆくなり。

見よ、其初めには、自らの思想を傳へむとする單なる用途が、今や又他に聽かむが爲めに迎合の役を帶ぶるなり、又そのよく他をして自を聽取せしめむが爲めに明快流暢なる口舌を用ゐんと欲し、又彼をして快く其自ら藏する處を披瀝せしめ我が聽取の材に資せんと欲するが爲めに快辭以て彼が胸鍵をとかむと欲するなり、かくの如くして口舌の實用は滔々として技術の域に漸進したる所に於てぞ、演說の術生じ、辨論の法成れるなり、かの堅白同異の辨の如きは、その初めより口舌の使命を逸して、嘲慢徒にその威力を恣にしたるものゝみ豈に言ふに足るものならむや。

◎

宗敎に於て又この道理を見るなり。

巧言令辭委曲縱橫以て法を說き敎を傳ふる者あるとき、吾等は惡感を以て先づ彼を迎ふるを常とすれども、彼に一片の老婆心切だにあらば、その巧言何ぞ必ずしも妨げむや、舞文曲筆の徒ありて、まことしやかに述ぶるをば吾等之を卑めども、その中眞に傳ふべき所のものを有せむには、舞文斷じて不可なりと言ふべからざるなり。

今の世には眞に巧言令色の徒もあらむ、さりながら罪はその巧言にあらず、そを用ゆる人の如何にあるなり、舞文必ずしも不可ならむや。その書く人の心事如何を問ふべきのみ、今日宗敎にかゝはれる人が、信仰を尊ぶが爲めに經論の煩はしきを嘲り、熱烈の至心をあげて冷靜なる道理何するものぞと罵る、經師用なくして人師のみ尊しと言ふか、しからば吾等に宗敎のみ尊くして哲學は其信仰を助けずと呼ぶの暴に陷らむなり、吾深く惟ふ、今日の靑年學生に苦悶あらば、その幾人はまことに如上の偏見に陷り、妄斷に惑はれつるものならむか。

◎

道を見ざるものは曰ふ、吾は唯パンを求むるなり、饑ゑたるものに石を與ふることなかれ、道は吾に要なきのみ」と又道を尊ぶものは曰ふ、パンは卑むべきなり、道のみ尊し」と而して彼等は相容れざるものゝ如く考へて道とパンとは遂に相比すべからざるものとなれる、恰も火水に於けると等しきに至れるあり、道を求むるものゝパンに妨げらるゝことはあらむ、而もパンや道に於て何の罪かある、今日信仰を求むるもの、學問をなみし、知識を卑むこと比々として皆しからざるはなし、之れ果して何等の徵ぞや、釋尊臨終の間際に於て讃嘆せらるゝ智慧の德を見よ。

汝等よ、
若し智慧あれば則ち貪著あるなく、常に自ら省察して失あらしめず、是則ち我が法の中に於て能く解脫するを得るなり。若しもしからざる者はこれ既に道人にもあらず、また白衣の人にもあらず、名くるなけむなり。
實智慧は則ち是れ老病死の海を渡るべき堅牢の船なり、また是れ無明黑暗を照すべき大明燈なり、一切の病者を醫すべき良藥なり、煩惱の樹を伐るべき利斧なり。
是の故に汝等よ、
當に聞慧と思慧と修慧とを以てして自ら增益すべきな

り。

もし人智慧の照しあるあらば、是れ肉眼なりとも而も明見の人たるをや。

まことに思半ばにすぐるあるにあらずや。

今日信仰を導くものやゝもすれば、その求道の門戸を指して曰く「爾が求むる所のもの彼處にあり」と而もその所に至りつくに、なほ「爾の止まる所も亦此處なり」と言はざるなきは、むしろ奇とすべきか、道を求めて進入する門戸と、道を抱へて昇進する行程と、そは信仰界のことなるが故に同じと言はゞ、強ゆるの甚だしきものにあらずや、登山の經驗あるものは自ら識らむ、山を仰いて山麓をわけのぼる時と、山坂をよぢて雲を吸ひ霞に入るの時と、その決して同じからざるなり、麓なる暗を照せし炬火の用は、今や岩根をよぢる金剛杖の用と代はれるなり、今日道を求むる者漸くにして信仰の門戸を入れども、その昇進の行程を有する人なきが爲めに否少くとも之を指示するの人なきが爲めに、遂に信仰を失ひて宗教の無用を叫ぶか、しからすんば宗教信者の名の下に晏如たるもの、數ふるに遑あらざるなり、苦悶の經驗を語る人はあり、修德の行程を示す人なし、あゝ。

◎

道元禪師が「菩提心」をのぶる中に

たとへ權實の妙典をよむあり、又顯密の教籍を傳ふるありとも、未だ名利を抛たずんば發心と稱するに未だし。

ある人曰く、菩提心とは無上正等覺心なり、名聞利養に拘るべからずと。ある人曰く、一念三千の觀解なりと、或人曰く、一念不生の法門なりと、或人曰く、入佛界心なりと、

かくの如き輩は未だ菩提心を知らずして、猥りに菩提心を謗するなり、佛道の中に於ては遠しとも遠し。

こゝろみに、吾我名利の當思を顧みよ、一念三千の性相を融するや否やと、一念不生の法門を證するや否やと、唯貪名愛利の妄念あるあり、更に菩提道心の取るべきものなきをや。

古來得道得法の聖人には同塵の方便ありとも未だ名利の邪念あらず、法執すらなし、況して世執をや。

唯暫く吾我を忘れて而も潛に修するは乃ち菩提心の親きものなり、、、、、。

佛道の行すべきを行ぜず、世情の斷つべきを斷たず、實法を厭ひ妄法を求むるはあに、錯れるにあらずや。

今日道を求むるもの又以て自ら警めとすべきなり。

◎

自力と云ひ他力といふ、こは救濟の門戸に名くる所か、こゝに「金ある者は來れ爾等に博利の術を授けむ」と叫ぶものあらむとき、金ある者何の狐疑を要すべき、直ちに走せてその法をきくべきのみ、しかも無資者に於て何の關する所ぞ、またこゝに「知慧ある者は集へ爾等に樂園の鍵を授けむ」と呼ぶとき、智慧ある者はひた走りに走せてその門に到りつくべけれども、金ある者に於て何の關はる所なき

にあらずや、自力門あり、他力門あり、これはこれ救濟の門戸のみしかるを自ら救はるべき身の誰か先づ狐疑して彼の門にゆくを可とせんか、この門にすゝむを是とすべきかと惑ふべきや、しかるをなほ、かの門は卑くしてこの門は高きなりと言はゞ、誰か其妄斷を許すべき、あゝ今の世の道を求むるもの彼等に類する所なきか、まことに愧づべきかな。

◎

無我は佛心なり。

◎

われ一日、花圃に灌がむと欲して尿水を溷むに、その色その泡沫一見まことにビールに似たるを覺にぬ、ときに思へり、もし人あり、その色とその泡沫との甚だ相似たるが故に、尿水とビールとは相同じと斷ずることあらむには吾等はその笑ふべき論理の爲めに驚倒すべし。

しかるに、吾等は數々この笑ふべき論理を用うることなきか多くの精神的病者が、宗教の信仰を得て癒えたりとの論據によりて「宗教は藥石のみ」と斷ずる者あり、暗を出てゝ光を仰ぎたるが如く、如來の慈光に浴したるが故に、秋の木の實の熟するが如く何時とも知らぬ間に信仰の得らるゝことあるを疑ふ者あり、自ら書を讀みて所得なく、信仰を以て安住を得たるが故に、讀書益なし自力畢竟これ無用なりと叫ぶ者あり。

昔エピクテート世に警めて曰く、人の富を得るを見れば即ち曰く彼は偉なりと、又大學者を見れば即ち曰く彼は偉なりといふは、今の世人の常なれど、彼等は須く下の如く之を言はざるべからず、かの人は富の上にて他の人にまさる」と又かの人は學者として他の人より偉なり」と、之をよむ今日の吾等は、實にこの哲人によりて諷刺せらるゝを感ずるにあらざるにあらずや。

* * * * * * *

大勇猛心

有馬祐政

すべて勇氣といふものは、何人にも必要であつて、事を成し遂げやうとするには、いくら智慧があり才德があつても、この勇氣がなくては、どうとも仕樣がないのであります。ちようど寢床の中にてかれこれと思案ばかりに明かし暮してをる、病人のやうな有樣である。それで一人前の立派な人間として世の中に立ち働く場合には、ぜひとも勇氣が始終あらねばならぬのであります。故に昔しからどちらの國でもこの勇氣を重んじてをつて、希臘などでは、最も多く此の勇氣を尊び、學者達も之れを唱へ、一般人民もそれを以て己が特色としてをつたのである。支那でも、古い所では、書經洪範に剛克といふことがかいてあり、それから、中庸には智と仁とに對してこの勇を三德の一としてをる。人信なくんば立たずであるが、事は勇なくては成らずとも申すべきであります。然し其の勇氣は決して暴虎馮河の勇でないことは勿論、又單なる武力や腕力の勇でもありませぬ。つまり意思の剛健で、何事にも屈せず撓まず、どん〳〵進んでゆくことをいふのであり

ます。即ちあらゆる心中の邪魔を斷ち切り、又外圍の障礙を打ち破りて、本來の目的を達するやうにすることであります。

凡そ何事を成すにも、種々の邪障がありまして、第一外圍の障礙、即ち自然的障礙とか人事的障礙とかいふやうなものが澤山あつて、妨害をいたすのである。自然的障礙とは、氣候風土などの不順不和であること、或は天變地妖などの起つてくることゞて、これは人力ではいかんともしがたき所でありまするが、己れの心の持ち方でどうとも利用ができ、又平常より身體のこれに堪へうるやうにしてをれば、さほどさまたげにはならぬのであつて、人力以上のものではあるが、直接の影響はまづかるいといふてよろしいのである。次に人事的障礙とは、國家社會の狀態を始めとして、鄕黨隣里の模樣や、さてはいろ〳〵の人々の所爲によつて、起つてくる所の妨害である。これはよほど力强き反抗を爲し支障となるもので、又數限りがないのである。一一これに打ち勝つてゆかうといふことは非常に困難である、殆んど不可能といつてもよいのであります。故にこれに對する自分の心の持ち樣が大切でありまして、まづ寬仁の度量、公明正大の態度を以て進んで行つたならば、曾に世の毀譽褒貶について超然たるを得るばかりでなく、自然にそれらをなくしてしまふことができるのである。それをこちらから一一相手になりて反駁していつたならば、火の手はます〳〵燃んになつて、どうにもこうにも治まりがつかぬことになり、隨つて枝末の方へばかり心がとられ力がはいつて、其の根本目的を顧みるの遑がないやうになつてしまふのであります。それでどうしても寬仁の度量を以てこれに接し、喧々囂々どれほど非難をしやうが、競爭をしやうが、自分は深く又確かにこれぞと思ひ込んだことならば、蕩直にそれを成し遂げることに全力を注いで、而も公明正大の態度を以て、徐ろに着實なる識者の贊襄を待つべきで、いはゆる知己を千載に求むるの慨がなくてはならぬ。それから國家社會の狀態とか、鄕黨隣里の模樣とか、うるさい事情もありまするが、これも致し方はない、たゞこの方よりしてそれらに適當な方法を以て融通をきかさなければなりませぬ。それが人として世に交はり事を成し遂ぐる所以の正道であります。たゞ自分ひとりでりきんでもそれはだめであります、まちがひであります。必ずや衆人あり鄕土あればこそ自分も立つて行けるのである。この理を想はずしてひやみに獨立自尊主義で暴進すると、却つて大いなる障害を惹起すのである、故にこれに對しても亦公平にして寬大なる處置を執らなければなりませぬ。要するに外圍の障礙に對しては寬大でなくてはならぬ。古聖が人を責むるは寬なるべしとあるは至言である。まして己れに對しての支障たるに過ぎぬことでは、尙更であつて、この方にはむしろ勇氣は不用といつてよろしいのであります。

然るに今度は自分の身體、自分の心中における障礙であります。これは直接にして而も最も有力なるもので、諸敎共にやかましく其の恐るべきを說き、切すらこれを驅逐せんことを勸めてをる。自分の身體については、貧病老死あり、これには何人も閉口であるが、其の中、貧や病は自身平素の不心得より來た結果で、一旦これにかゝつたならば恢復は困難なれども、能く終りを始めに愼みて、せつかく業務に勉强し、又衛生に注意したならば、その障礙を未前に防ぐことができる。されど人情の常として、安逸遊惰を好み、又濫飲暴食を爲し易きものであるから、これを制止せんには、則ちいはゆる勇氣がなくてはならぬ。つまり身體をして、飢渴寒熱に堪へうるやうに、平素より勇氣を以て鍛錬せなければならぬ。そうすれば貧病は跡を絕つのである。よし現在貧に苦しみ病に惱でんゐても、心に勇氣を保つて、十分に勉强し、若くは十分に攝養したならば、いつかは恢復ができるものである。老死の事は天命であるから、如何ともすべからざるものであるが、これも貧病を免るゝに力むるときは、老いてます〳〵壯んに、壽命も永く得ること請合てあります。故に身體の上においては、常にわれ〳〵は勇氣を保つてをらぬければならぬ。勇氣が肝要であります。

身體における障礙に對してすら然りでありまするから、この心中における障礙に對しては、勇氣の切要なること、言ひ表はされないほどであります。儒敎では克己復禮と申してをつて、これを仁の義とし、最も重要なるものとしてをります。就中克己が至極大切である。自己心中のあらゆる私欲私情といふ障礙を克征すれば、自ら道德的なるに至るものとしてをる。而してこの克己には勇氣が十分に活働してゐなければならぬ。言ひ換ふれば、勇氣は實に其の克己の要素であるのであります。尙極言すれば、克己即ち勇氣といふてよいのである。己を責むるは嚴なれといふ言はこゝのことであります。兎に角道德的なること即ち復禮といふことに對してさへ、勇氣が至極必要であるとしたならば、宗敎的悟道においては申すまでもないことである。佛敎では、これらの障礙を魔維（マーラ）、讀じて惡魔といひ、種々に區別して、各々名目をつけてあります。三魔、四魔、八魔、十魔、十二魔等さま〳〵であるが、「華嚴經」では、陰魔、煩惱魔、業魔、心魔、死魔、天魔、善根魔、三昧魔、善知識魔、菩提心法智魔とし、「大智度論」では、欲、憂愁、飢渴、愛、睡眠、怖畏、疑、含毒、利養、自高の目を揭げて、軍々と稱し、又「佛本行集經」では、欲貪、不歡喜、飢渴寒熱等、愛着、睡眠、驚怖恐畏、孤疑惑、瞋恚忿怒、競利爭名、愚痴無知、自譽矜高、恆常毀他人の十二軍を設けてあります。實にこれらの惡魔は絕えず强大なる軍勢、鋭利なる武器を以て、われ〳〵の心中に入り込んでをる、若しそのまゝにまかせば、自滅より外はないので、獅子身中の蟲どころではないのであります。其の力の强くして而もわれ〳〵の根據本城に侵入してをつて、其の害毒はこの上なく劇烈であるから、これに對しては又至上の勇氣を以て應ぜねばならぬ、而もこれに打ち勝たねばならぬ。佛敎ではこれを惡魔降伏といひ、釋迦如來が親しく此の大軍事を行ひ大戰功を得たまひたのであつて、その勇氣を大勇猛心と申すのであります。

然しながらわれ〳〵共には果してかやうな大勇猛心がありませうか。今度の日露大戰爭において、海に陸に、劇烈なる敵彈、暴惡なる敵刄を犯して、自ら死地に突入する、わが帝國軍人の勇氣には、世界何人も驚かぬものはないのであります。

す。これ固より大勇猛心の一大發現であつて、確かにわが日本民族にはかゝる大勇猛心の存有を證明してをるのであります。即ちこれは「華嚴經」及び「法華經」「大智度論」等にいはゆる死魔降伏の事に當るのであります。しかもその帝國軍人の勇猛心は根源どこにあるかといふに、衆口一致、祖先傳來の神靈なりとしてをる。其の代表者たる廣瀨中佐は既に軍神として崇稱せられてをるのであります。つまりかくの如き勇猛心は平凡の教育や、普通の道德で養成せらるゝものではなくして、これを靈妙なる神慮神意に歸するの外ないのであります。そこで宗教的悟道に要する諸種惡魔妖軍を降伏せしむるに足るべき大勇猛心はどこから來たかといふに、單にこれを一國に崇むる所の特殊なる神靈のみに歸せしむることはできぬ。即ち普遍的平等的なる神靈とすべきである。是れ取りも直さず佛心である佛陀より賜はりたる所の御心であると申さねばならぬ。而して其の佛心はどうして得らるゝかどうして賜はるかといふに、學問の功や、教育の力のみに依賴するわけにはゆかぬ、强く云はゞ唯佛を信ずる一念にある、彌陀を觀得したる其時にあるのである。われ〳〵には生來かゝる心なきも、宗教的煩悶に陷りたるの極、能く此の念を生ずるの機が來るのである。其の趣は實に不可思議であります。而して其の結果、勇猛精進、又不可思議の德益を生ずるものであります。

惟ふにわが、日本國は將來眞に意識し自覺したる大勇者を要することがいよ〳〵切でありませうから、祖先傳來の神靈を發揮すると共に、宗教的信念を發得して、以て大勇猛心を振起し、あらゆる方面に向つて、それ〴〵大事業を成し大勳功を立つるやうになりたいことゝ、不斷に熱望いたしてをります。

* * * * * * *

親しむことの力

求道學人

夏の休のあるむしあつき夜でありました、

人にどんなに心をかけても自分の生んだ兒ほど可愛きものはない、親類でも他人でも、やはり自分の親身の親には出來ぬものである」と母上が申されました故、私は釋尊は三界の衆生を見そなはしては「皆これ我子なり」と申されてある故に、私どもでも必ずその如き偏愛なき心となるであらうと思ひまする旨母上にお話したら、そうかと默られた故、世には人の子を貰ふて育てゝ自分の子と可愛るのもあれば、又少さい中に貰はれて養父母をばまことの父母としてなづかしむ子女もある故に、親として子に對する愛情の厚薄はその親しみの淺深と年月の長短とにかゝはることでありますまいかと申しましたのをよく記憶して居りまする、

その後色々の書をよみなどしてから、どうもかのお話が私の心の一問題となりました、猶如赤子の思を貯ふるとか、その他かやうな類の言葉が經文などに時々見ゆる度毎、佛の心の偏愛なきを信じてはひそかに自分の考ふる所が當れりや否やをためして居りましたが、この秋になり、夜毎の靜かさを

增すにつれて、私は自分を以て經驗することの出來たのが、この「親しむことの力」の偉大なる事であります。

今迄も私は宗教の唯一なる生命の源泉は、その奉ずる教祖その人の人格であつて、つまりその人格の生々したる靈能と親み、相接するにより、ある心强き力をも得れば、又その多年間の經驗をば、手から手へと物を受取るが如くに、それを受得するのである、信仰に、つまり時間と空間を施して所謂「トブ」といふのが此教祖の人格と信仰の主体とが一致する所に發する不可思議の現象に過ぎないのである、如來といふ文字の語義も、信仰の至情を以て、客体と主体とが全く合体一致することにあると聞いてからは、深く之を信じて居たのでありましたが、この度は愈々自分の信念を確めました。

母上の膝下を離れて參つてあと二月あまりを經つたばかりであるのに、二年も三年もれ膝下に參らぬやうな心地ばかり致しまする、そうして間がな暇がな母上の御側のみ慕はしく感じられて飛ぶに甲斐なき身をもどかしく思ふとも度々ありまする、有体に自分の心狀をすかして見ると、何とも知らぬある見るべからざる强き糸が掛つてあつて、自分はその糸を傳へて始終引きつけらるゝ樣にも思はるゝのでござりまする、想へば私が母上の下に住み馴れて、新たなる弟妹と共に親む樣になつてから、丁度一星霜を經たばかりでありまするけれども、其間自分は自分の親にも受けぬ程の愛情と親切とを以てあしらはれたにせ、其間とては甚だ長いとは申されませぬ、古來、兩洋の哲人や宗教家がその子弟を養育する時には、五年も廿年も乃至は五十年も一生も、彼等と共に親しく生活をせられたのであればこそ、肉身長へに亡びても、なほその德化と教義とは千古の法となつて今日にも傳はり動いて居るのでありまする、して見れば自分が此秋頻りに母上の下なづかしく慕び參らする心に堪へられぬのも、謂はゞ唯だ私が親み參らせし其力に動かされ導かれて居るのでありますまいか、

始終私が聞いて居りまする事に、私共の身と魂とは別々の物で相離れて居たもので、魂の世界では靈能至らざる所なきものであるけれども、一旦肉の体に宿り來てから、餘りに永くなつた爲めに、その本來の住家を忘れ果てゝ、今は唯假り住居の肉の体をなづかしみ、離れともなく思ふのであると申しまするが、とにかく「親しみの力の偉大なること」をあらはす所のものとしては、中々趣味ふかきことゝ思ひまする。「染着の久しさ」と云ひ「薰習の長き間」と申すことのあるのも、向上と向下との差こそあれ、親むことの力を色々にあらはしたものと見えまする、私共が修養と申すことも、唯この親しみの力を善用することであり、その善用を助くる爲めに戒律も起り、禪定もいるのであります。

私は、自分が夙に佛の教に親むことが出來て、何時とも知らぬ間に、その德をなづかしく、我身にも之をつけむとするの覺悟を以て、喜び信じて居りまする。

賴まれて人の物でも集むるかのやうに佛の教をあさりあるき、又は經律論を眺めつゝ、その中から信仰の火をも、序でに採らうとするやうな者には、佛の大願のわかる筈がありませぬまして大慈大悲の鴻恩を感得することが出來ましやうか。

あまり樂しく感じました故書いてあげまする。

母上樣　十一月六日

盲者は幸なり

百目木劍虹

世の中に悲むべきものが多いけれども、殊に悲むべきは盲目者である。父母あれども親しく父母の顔を見ることも出來ず、妻子あれども自ら妻子の顔を見ることも出來ぬ。障壁を隔たて〻聲をきくよりも尙悲むへき事である。現在父母ありながら、妻子ありながら其笑顔に接することの出來ぬとは何たる悲むべき不幸である。或は月の光りも仰くこと出來ず、花の美を賞することも出來ぬ。淙々たる溪流これ何の響、嚶々たる鳥聲これ何の音。彼等にありては共に識別するとを得ざるのみならず、更に之を樂むの心を起さゞるのである。凡のて人が愉快らしく自由自在に歩行し得るのであるが、彼のみは一本の杖を已が生命として遲々として覺束なき歩を移すのである。石の横はるも知らず、路の迂回せるをも知らすして、歩々闇に向て進むのである。若しそれ危き斷橋を渡るものあらば先づ彼等也。眼を開きつゝ斷岸に立つものは常人の爲し能はざる所、盲者あはれむべし、盲目の人悲むべきである。更に悲むべくあはれむべきは心の暗き人也、心眼の閉ぢたる人である。盲者猶救ふべけむも、獨り心眼の盲せるに至りては如何ともすへからず。眼をひらきつゝ人を呪ふものは彼也。惡魔の劍を提くるも彼也。鬼神を作るも彼也。平和の心を亂すもの、虎狼の牙を磨くもの、一として彼の力ならざるはなく、理性を沒し、判斷を滅し、良心の光りを見ず、否見ゐざるものである。彼は闇の人也、夢の人也。進むて人を害し、退いて惡を爲し、自ら止まるを知らざる毒刄である。恐るべきは心の闇路也、闇愈々黑うして道に近く能はず、只毒刄の猛り狂ふあるのみ。迷雲益々密にして三毒の雨愈々繁けきは、蓋し心の盲せる人に於て始めて名くべきである。

盲は一なりと雖、恐るべきは心の盲なるより甚しきはなかるべく、肉眼の盲せる者は時として一種の滿足を見出すことがある。父母兄妹の溫言によりて滿足を見出し、胸中自ら別乾坤をひらき來りて花あり、月あり、樓臺あり、自らほゝ笑み且ひ喜び且つ樂むのである。而して道を行には杖あり、彼が生命を托するものはげに此杖也。杖は彼を照す光である。蹉るゝも杖と共にし、躓くも杖と共にし、立つも杖也、進むも杖也。杖は絕對の親也、無限の力也。杖を絕對に信ずるものは彼也、彼を永遠に救はむとするものは亦杖である。彼は全く自己を見ざる也。自己の力を賴まざる也。寧ろ自己の無能を高く標置して喜んで杖を握るのである。富まざるものは幸なり、力なきものも亦幸である。彼は曾て地の花も知らず、天の星も知らぬ。されど彼が胸の天地には美くしき其花、かゝやける其星は宿れるのである。彼は地の花を知らずと雖、心の花咲けるを見む。彼は天の星を知らずと雖、胸の星かゝやけるを見む。永劫の樂みはこゝにあり、何ぞ彼は幸なる。

幸なるべき我等は煩惱の霧深くして心眼堅く閉ぢ、却て兩眼をひらきつゝ墮落の岸に立つのである。心の暗きものは向上の道、狹まくして進みかたく、墮落の坂は急にして自ら之に傾きやすい。思へらく、自ら爲せる事は神聖なりとして高ぶるのである。人の爲せる事は不潔なりとして嘲るのである。自ら神聖と思ふものにいかて神聖のものやあるべき。自ら慈善を施せりと思ふ慈善は決して眞正の慈善となるべき筈がない。道德の冠を頂くものには尊むべき德行家はない。宗敎の衣を着くるものに賞すべき宗敎家はない。たゞ信仰を口にするもの、あやしき信仰家也。蓮如上人は深く之を內に貯へよと云ひぬ。內より發する光りは眞の光り也、外より發する光りならばそは僞りの光である。一たび心眼をひらき來れよ、闇は消え去りて路は坦々として通し、又充塞の憂ひなく、佛の杖はこゝに與へられぬ。たとへ斷岸の危にのぞむことあるも、佛の杖と共にのぞむのである。道極まりて進むべき處なしとするも、佛の杖と共にゆくのである。斃るゝも佛と共にあり、行くも佛と共にあり。一進一退我等の運命はたゞ佛の杖によりて行動するのみ。我等の行動は佛の行動也。仆れたりとて怨むべきにあらず、溺れたりとて悲むべきにあらず、佛はかねてよきやうに計らはせ玉ふのである。饑にあるものは食のよしあしを論ずるに及ばぬ、食にのゞみて不平を云ふもの未だ求むるものではない。求めざるものは事實門に入らざる也。求むるが故に信ずるのである。信ずるが故に佛の光を仰ぐのである。信ぜざれば止む、苟も信ずる以上は形の上の盲者と心の上の盲者たるを問はす、佛は平等に救濟の杖を與へ玉ふのである。闇にあるもの一度は此杖を握らざるを得んのである。そして奧深く向上の道に入ることが出來る。杖を握る盲者は幸なり、佛の杖を得ざるもの眞に悲むべきである。

風尚餘韻

煩悶兒水野

鶴田耿介

《天うつ浪……露伴》

曾て桂月をして「昨年九月以來の讀賣新聞をよまざるものは、共に文學を語るに足らざる也、沈默せる露伴天うつ浪といふ大小說を出しはじめたり」と絕叫せしめし天うつ浪の續稿も、北海の凶報はしなく、露伴が春駘蕩の詩の國を、攪亂して中絕せしと雖も、日ならず再び讀賣紙上に現はれて、蕭條たる晩秋万朶の花を咲かさんとす、われ當時扉川江畔の客舍にあり、悶々の情を之に慰し未見の友を得たるを、感ぜしこと今に及んで忘る能はず、天うつ浪や、水野や、余にありては無限の趣味無限の同情にてありき、兼六の春に三毒の苦惱を觀じ、今や悲雁の哀々を東都に聞く、竹芝浦の夕ぐれ增上寺の鐘聲一片の情感なからんや、惡寫實惡趣味に滿ちたる今の小說壇は露伴と蘆花とありて、異臭裡芳香の馥郁たるものある也。

天うつ浪の主人公水野は春秋正に二十四、一生をかけて世

に一篇の詩を留むることを最上の理想とし、現世のあらゆる富貴と名利とを擲ちて、詩の神の御前に脆き、常住の月そこに輝き不斷の花そこにほふ空想に耽りし詩人也、然るに好事魔多し水野がたのしきエデンの園は久しからずして破れぬ、水野は己と同じ小學校の女教師、岩崎五十子に落花の情を寄せたり、五十子は水野を厭ひて流水の情を濺がずこゝに一場の悲劇を惹起しき、五十子は重き腸窒扶斯にかゝり病床に呻吟すと雖も、花柳性を受たる彼女の繼母は、かれゆく秋の薄の如く日に凋落する五十子を見ること他人の如し、多情多感なる水野は自ら戀人の爲に醫師を招き費用を與へ、あらゆる手段をつくして五十子を介抱すれども、止ぬる哉五十子は虫のすかぬ水野の顏を見るさへ厭へり、水野は之を思ひかれを思ひ茫乎として心神の收まる處を知らず、九天に碧血の雨をそゝぎ、九地に紅涙の浪を漲らせ遂に宗教に入るの止むを得ざるに到りぬ、於是乎曾て宇都宮二荒山神社の廣前にて行末長く信義をつくし合はんと盟ひし水野が友は彼れを戀愛の痴夢より覺さんとし種々の忠言を試む、豪勇不撓の少尉日方あり、俠氣溢るゝ島木あり、沈毅眞率なる羽勝あり、其間には水野が宿の愛孃濱子あり五十子が繼母の弟子お龍あり、各活躍せる性格を具へ水野を中心として働く、之れ天うつ浪前篇の梗概なり。

戀は苦の種、人間一度戀の惡魔に魅せられては、雲を失ひし龍よりも勞なく、水をはなれし魚よりも脆し、情を柳髮の色に染むれば春の思ひ亂れ易く、心を蘭質の手に移せば秋の露しば〳〵果敢なしとかや、しかも水野の戀は片思ひのそれなり、人生の恨事何物か之にしかんや、コールリッジ曰く

All thoughts, all passions, all delights,
Whatever stirs this mortal frame,
All are but ministers of Love.

かくの如きの戀、一度破れては心神調和を失する又奇ならんや、空想にあこがれし水野は今戀のあはれさを知り初めぬ、心は黄海に漂へる小舟の如くに靜安を許さず、是より情士涙華多く百年の感慨只生涯を哀しみつゝ、墨江の夜月は愁を釀し四木の暮雨は斷腸の種となれり。

一日水野は島木が宿よりのかへるさ淺草の雷門にさしかゝれり、露伴は此時の水野の胸中を畫いて曰く「我智慧の今効なきを知り我意念の今孱弱きを知り斷えぬ泉と湧き上る戀の誠に洗はれて、心は無垢の往時に返りぬ、ア、今我は嬰兒なり！天地の那處に慈母の御座す？泣きて呼び度き心地ぞする」と、水野は此日はじめて觀世音菩薩を拜し奉りたり、われ京に到るの翌日淺草觀音堂に參詣しき、金壁燦然人目を眩するの殿堂はあれど、大鼓の曲鐘の音皆俗物の響なり、そこには婀娜たる婢婦徘徊し、かしこには氣障なる遊冶郎徘徊す、此厭ふべき俗地も露伴の筆によりて美化されたり、秋曉薄紫のもや四邊をこめ御燈明の光黄金色にきらめく處、戀になやめる水野と念彼觀音力、應時得消散と誦する老人とア、何ぞ其景の崇高なるやア、詩は花なり、淺草の俗界も詩人が花の如き空想に畫き出されては淸淨世界となる偉なる哉詩人の筆！

谷鶯まりて水流れ、智襄り光明來る、水野は今し天地の神にすがりたき心地せり、水野は今迄知らざりし趣味を覺えたり、蓋し宗教的信仰に入るの初め也、物の響をおこさざりし觀音堂は

「ハッオイまだ此樣なものを本氣で禮拜するものがあるぜ！」
「ウン可惡なものさ五六世紀も前の思想に養はれて居るのだからナ」

と二人の書生の罵れる聲に俄かに騷がしくなれり、讀者よ之水野と老人とを罵るの聲にあらず、吾人を罵るの聲なり宗教を第三者の地位より見る輩が得々として發するの語也、罵らば罵れ柔惰主義なりと云はゞいへ、憐むべき哉彼等は信仰を知らざる也苦悶を解せざる也、吾人の信念は嚴として彼等の言によりて動ずるものにあらず、世の人は狂へり學者は迷へり、春の夜の夢にも似たる榮華にあくがるゝ彼等の不甲斐なさ、かれらは此世にも永遠の春ありといふ、されど槿花一朝のさかえにて、ろは無常の春なることを知らず、曾々志をひるがへして佛を念じ神を信ずる若人あれば、時勢後れの、變物よと罵る吾人はかくの如き人には

「われらが如く下根の凡夫一文不通のものゝ信ずれば助かるよし承りて信ト さふらへば我等が爲には最上の法にてまします御さまたげある可らず」

と答へんのみ、水野を誘ひし老人は信仰の眼より見れば是れ善智識也、如來の御手引也、如來は念々刹那も吾人をよきにみちびき玉ふ、此時水野は只趣味を感じたるのみにて未だ佛の慈悲を感得するに到らずして暗黑の境をたどりき。

「大變に惡い！いけないかも知れ……ア、僕あ何樣したらよかろう……」

と五十子の愛弟松之助の泣聲に、天に星なく地に風休む夜、君を思ふて我容瘁するに我顏見るをさへ忌める人の病室の前に立つゝも、中に入る術なくて蒼蒼たる椎の大樹の下、有りや神佛の？有るにも似たる哉！無きや神佛の？無きにも似たる哉！と切實なる苦悶にうたれて石人の如く突立しことありき、ある時は答まだかたく春を未だ知らぬお濱ちやん並びに浮世の酸きも甘きもかみ知れる山路老人とさみしき夜、栗を味ひつゝ邪氣なき濱子が會話に苦悶を忘れしも束の間や折からべう〳〵と鳴ける狗の聲に生れぬさきの世を思ひ卒然として身震ひせしこともありき。

余は露伴の此妙筆を何と讃せんすべを知らず、犬の遠吠の章は天うつ浪第一の妙文也思ふに露伴先生、此文を作るの時夜已にふけて寒犬の何に驚きてや、万籟の寂々たるを破りて一聲又一聲腸を絞るが如きに、三世因果の妙趣を感じ來り己先づ魅せられて文をやりしものなるべし、宜なる哉讀む者をして深遠なる哲學書を繙きたるが如く無限の神秘を感ぜしむることや、ア、之れ最高の宗教哲學の教へんとする處、堂々たる宗教家先生の說教百方言遂に詩人一管の筆に如かず、諸君乞ふ天うつ浪、其四十八四十九五十及五十一を取つてよめ

濱「あの狗はほんとうに可厭な狗ネエ――過日先生が出て行つしやつた夜も矢張り彼の通りの聲をして彼の見當で鳴いて居たのよ……あのネ嘴黄ネ姿がずつと小かつた時――まだ三歳四歳で姿の眞實の御母さんが生きて居た時にネ姿がお母さんに抱かれてうと〳〵として居ると遠くの遠くの方でもつて狗の鳴いたのが聞えたのよ、ういてネエ過日の夜ある狗の聲を聞いて思ひ出して見るとあの狗はやつぱり其時の狗であの聲もやつぱり當時の聲で而してあの狗の聲を聞いて可厭に淋しいと思つた其心持もやつぱり其時いやーに淋しいと思つた其心持だと思へたのよ而して何だか姿あ姿の前の世といふ時にも矢張り此樣な淋しい晩にやつぱり彼樣な狗の聲を聞いてやぱり妙な心持が爲たやうな氣がしてならないのよ！

眞理は學者に隱れて愚者に現はる、少女は今眞理を語る也、

水野は其夜恐ろしき夢に魘はれ又もべう〳〵となく狗の聲をきゝぬ、露伴子が「かゝる夜深きに何をか見て吠えし人の魂魄にても飛びたるかや、あゝ」の靈筆をよみて余も亦慄然として鬼氣に襲はるゝ如きを感ぜり、余は曾て行基菩薩の

山鳥のほろ〳〵と鳴く聲きけば
父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ

なる歌をよみ深奥なる趣味を感じき、然れ共露伴子が妙筆は百尺竿頭一歩をすゝむるもの也、水野はかくして暗々として傷み沈々として悲み、口味を解せず耳聲をきかず、デンマークの王子ハムレットの如く天と地との間を遑ひめぐるあはれなるをのことなりき、戀人の病は前の日より凶きかたに進み、氣味あしき狗は凶事の前兆かと疑はれたり、水野は醫を淺草に迎へての歸路、五十子の病を氣遣ひ忽乎として失神せるものゝ如く、吾妻橋へ渡らんとせる時先の老人はしひて水野を觀音堂に伴ひ、己と共に本尊を拜さしめき「一零時は頭を下げ眼を瞑ぎて一心に大慈大悲の我菩薩をば我を忘れて念じ奉りしが、佛力甚深測る可らず時に不思議や水野は忽ち心の闇に朝日の射して胸の氷の春風に逢へるが如き思ひのしつ今まで知らざりし慰安を得て何とはなしの添さに涙は止めんとして止めあへず、水晶の珠數俄にきれて留まらぬ珠のばら〳〵と緒より亂れて落つるが如く泫然として泣きに泣きたり」ア、慈悲巨海の如き佛陀の光明は、苦悶の水野をも攝取し玉ひぬ、われ犀川江畔この節に到りて感涙汪々たりしこと今にして忘る能はず、バイロンの The prisoner of chillon を想出せり。

二重の壁にて世界と隔かたるチロン牢獄の囚人、悲哀高じ來ては思想もなく感情もなく、半ば死し半ば眠り自他を辨ぜざるの時、かれの頭腦に一道の光明を與へしものは、天來の小鳥なりし、獄屋の窓の邊に泉の如き愛の言葉を送る小鳥の妙音に、囚人は恍惚として無感覺の夢よりさめ先づ發せしものは瀧の如き涙なりき、泣くより外はなかりし也、蘆花が雨後の月の女主人公、男の無情を怒り死を決したる時に初めてさまよへるものよ、立かへりて天つふる里の父を見よやてふ讃美歌が油の如く身にしみ渡りしなれ。

此事ありてより水野は信心ぶかき信者となりつ、幾度となく觀音堂に詣でぬ、水野が友日方少尉はかれが一婦人のために、日にまし形容枯槁しゆくを眺め、又は水野が女々しき戀の歌を見さては机上の普門品を見て迷信となし、慷慨悲憤腕力に訴へてもかれを苦諫せんとせり「此頃の墮落の仕方は何といふ情ない態だ其顏の憔悴は何からの罪だ婦女が何だ！戀が何だ目をさませ水野」と骨太岩疊づくりの日方は普門品を右手に水野が顏を丁々と叩きたり、遠洋航海に荒立つ風、さかまく涙と戰ひて深謀遠慮の念を養ひし謹嚴の羽勝ははやり立つ日方を制し語を改めて海上生活の趣味自然造化の美景に接して區々たる戀情を忘れんことを說きぬ、日方羽勝が去りて後水野は何を思へるか、羽勝が言ひし海上生活か、否、日方か無禮か、否、かれは物やさしきお龍を思へる也、之何の故ぞや、吾人をして少しくお龍とは如何なる婦人なるやを語らしめよ。

お龍は五十子が繼母の内弟子也菩破るゝの頃、建具屋の息

子源と人知れず情を通ぜしが、變り易きは男心源の變心を見て憤怒の念にたへず、安部川に身を投ぜんとして、助けられ、それより深く世の男の無情を怨めるもの、曾て瀛車中水野が普門品を所持するを見ては、どの樣な悲しき願のあるか知らねど若き人の神頼み、願くば妾の如く戀故でなかれかしと已が身にこひの苦しさを知れるものから、切實の同情を水野に表せし婦人也、人の精神は相感應す、呼ぶ聲あれば答ふる聲なからめや、氣高き相こそなけれ、野の花のおのづから人の意を惹くの色香あるてふお龍か己の足を踏みし時も、心をつくして手を盡しくれしこと、我と共に五十子が病氣の本腹を觀音堂に祈りくるゝ親切に感ずる水野なれば、今お龍が身を思へるなれ、我百年の命を擲ちて君が一片の情にかへんも辭せじと思へる水野に、戀か何か女が何かと罵ればとて如何で思ひ止めらるべき、お龍は水野の苦腦を思ひやり、水野はお龍の薄命を憫れむア、異性が同情を憐れむの情はやがて戀の初にはあらずや。

露伴はこゝに筆を擱けり吾人は樂んで此後の發展を見んと欲す、ア、天下に有情の人なし、赤子井に臨むも、病夫死に瀕するも、笑ふて顧みざる世也同情もなく慰藉もなし、信仰に入らずんば何んぞ安住の地を得んや、我れ苦悶に陷りし時ある友はいひき「何から何までめそ〳〵と神や佛やに厄介をかけるもの哉一番憤發して世に逆ひ腕推してもやる氣にならずや」と又世情に通ぜる才子肌の一友はいひき「君は何を苦悶するや目をひらかへして見よ、世は樂し、日はかゞやけり、花は笑へり鳥は鳴けり」と、是等は一として余が慰藉にはあらざりき、此時同情を以て佛陀の慈愛を示せしもの之れ唯一の善智識なりき、同情なき宗教家は人の心琴にふるゝと能はず只夫れ同情にある哉、昔阿闍世王が王舍城中大苦悶に陷りし時、月稱や藏德や吉德や悉知義やの冷やかなる說法は釋尊が一言の同情にしかざりき、諸君よ水野をして露伴子が架空の人物なりと思ふ勿れ、かくの如きの苦悶を抱きかくの如き煩腦に泣くもの只水野のみならんや、藤村君は逝けり、透谷君は逝けり、逍遙君は逝けり、ア、われは多情多感の幽欝詩人を思ふて未だ曾て佛陀の慈悲廣大を傳へんとの念禁ずること能はず、中野逍遙子歌ふて曰く

醉唱一編行路難、雲山渺々水漫々、半生不解人間樂、百代遠遊世上歡、夢過南湘絕關塞、筆招北斗近欄干、夜如何也天將曉、痛惡向吾風露寒、

ア、今や秋風枯葉を吹て颯々として鳴り、木葉落ちて白露路に横はる、天打つ浪をよんで感切なり、此文を作る時に十一月六日夜十二時

* * * * * * *

水蔭草

活泉

故郷

赤きは智惠のみ光か、
黄なるは慈悲のみさとしか、
秋野をこえて川こえて、
森の木かげにみかへれば、
あゝわれやみ光の内に、

あゝわれやみさとしの内に、
さまよひてこゝに故郷、

花つみし昔の木かげ、
葉はおちてくものす亂れ、
馬おひて下りし堤、
葦のほの白く波立ち、
鎌ときて草かりし畔、
みだれたる稻穗にかくれ、
思ひての切なるかたみ、
はてしなき大野の原を、
あゝ十年けふまためぐる、

み光

よわかりしこの身、
雨につけ風につけ、
涙こそ友なりしか、

この世遠きみそらを、
あこがれし朝夕、
深きもたゑをいだいて、
このうつし世をのろひぬ、

けむりかそもうらわかき戀、
もえしはたゞ一時、

ひやゝけきむくろだいて、
なきしはそもゆめか、

にかき世のさかづきに、
怨ずる歌の調よわく、
唇ふれしわれやうつゝ、

今大靈のいきにふれ、
無碍の慈光にてらされて、
なほなげかんや徒に、
見よわが前にあらはるゝ、
妙華あまねき莊嚴の土、
異香薫ずる清淨の國、
來れとまねくみ佛の、
さゝけのみ手に身をよせて、
かゝるわれらは力なり、

讃歎の聲ほそくとも、
至心歡喜のゑみの内に、
とはの命のこもらずや、

＊　＊　＊　＊　＊

故ハーン氏

梅澤和軒

花の下にて春死なむと歌ひ且つ死せる西行もあれど、秋は

文士の終焉期なるが如し。特更に過去帳を繙いて一々點鬼簿を點檢するを要せず、近くは一葉、子規、樗牛、操山、抱一庵諸子を偲ぶ者、何人か此の哀感なからん、而も吾人はハーン氏の易簀によりて、更に此の哀觀を新にせる心地すなり。

一門外漢あり。ヨヤバン、ガゼットに論じて曰はく、日本人は外人を優待すれど、歸化外人は白人として此れを逆待するが如し、ハーン氏の如きは、其の好適例なりとす。此は云ふまでもなく、人種的偏見に基する論議なれど、我が學海の吏臭は少くともハーン氏の如き世界的文豪をさへ逆待せる傾向ありしが如し。此れ一にはハーン氏の性癖に因りしが如きも、我が官臭の偏見より、其の眞價を認めても、なほ之れを度外視せるものか。吾人はハーン氏が晩年早稻田大學に入りて、始めて一味の溫情に觸れたりと云へるを見ても、凡べての日本人が、歸化外人を逆待する事なきを證明する者なるを信ず。早稻田學風の美所は、かゝる世界的文豪をも感化し得る、藹々たる和氣と溫情とにあり。吏臭なく尊大なく事大なく、平民的にして、而も獨立自恃、自由平等博愛の新空氣の磅礴するにあり。ハーン氏は、此の和氣の中に生活する事極めて短くして世を辭せるは傷しき極にこそ。

ハーン氏は一八五〇年アイルランドのイオニヤ群島中なるLencadiaに生る。父は愛蘭人、母は希臘人にして、學校教育を受けず、多くは自修せり。一八六九年米國に赴きて、印刷業を營み後にシンシナチ市のCommecial Advertiserの記者となれり、此れ氏が新聞記者たる始にして、また文學者たるの嚆矢なりとす。傳へ云ふ、一日同新聞の主筆某に面會を求むる者あり、風采醜惡、一見落魂の士なるを示す。時に主筆某文筆多忙の故を以て面會を謝絶し、後刻來訪せんことを乞ふ。落魂の士即ち後刻まで待たんと云ふ。某其の言の如くす。やがて小閑を得て落魂の士を見る。士の云はく願くは探訪者たるを得んか、余や糊口に窮すと。然るに主筆は探訪の必要なきを以てし、二三日後更めて來訪せよと云へるに、士の云はく、余や宿すべき家なし、希くは編輯所の一隅を借らんと。主筆其の意に任す。此の夜シンシナチ市に大火起り、警鐘亂打す。時當に深夜、編輯所に一の記者なく探訪なし、主筆即ち此の新來の落魂士に命じて、大火を視察せしむ。士欣然として鉛筆と手帳とを携へ、東奔西走、歸來一長文を草して火災の實景を描く。災中災後の光景紙上に躍如して恰も名工の如し。主筆喜んで此れを掲載す。天明新紙は家々の卓上に讀まるゝに及んで、社會は始めてアドバータイザーに一文豪の現はれたるを知り、嘖々之れを評判せり。何ぞ計らん、此の文豪こそは落魂の一窮措大ハーン氏其の人ならむとは。文士の生涯は如何にも文士らしくなりぬ。かくてハーンは新聞記者として成功し、後ニウ、オーレアンスの一新聞の主筆となりぬ。久之佛領西印度にありしが、一九九〇年日本に來りて始めて出雲松江の中學に講師たり。此處に小泉氏を嫁りて出雲の大社にて結婚式を擧げ、小泉氏の入夫となりて日本に歸化せり。かくて姓名を小泉八雲と改む。

八雲立つ出雲八重垣妻込めに
　八重垣つくる其の八重垣を

あはれ素尊に耻ぢざりし其の人よ、愛しき妻子を後にして、

彼の白雲に乘して帝鄕に遊べるか。

かくして文士の生涯は、愈々文士らしくなりにしが、後熊本高等學校に敎鞭を執り、一八九六年より一九〇三年まで、東京帝國文學大學に在りて、近世の英文學を講じけるが、赤門の吏風は、世界的文豪を入るゝには、余りに偏狹なりけむ。氏は職を辭して靜かに文筆に從事しけるが、昨年早稻田に聘せられぬ、同大學の誇にして又花なりしが、九月二十六日、心臟神經痛を病み、俄に逝去せるは、惜みてもなほ余りあり、前に露國はチエホフを失ひ、我國今ハーン氏を失ふ。軍國の文界何ぞ不幸多きや

氏は寂寞の詩人にして、特に日本の秋を愛せりと云ふ。嘗てコブ寺の近傍にあるや、其の墓地を研究して「死の文學」をものし、之れを其の著 Exotics and Retrospectives に入れたり

余は其の墓地をさまよふを好む。其の墓地なる大樹の薄明の壯あると。數世紀を經て、積みに積める沈默を感じ、人をして市町と其の雜沓とを忘れて、夢む時、空以外に奔らしむるを得るが爲ならむも、而も余が其の墓地を愛するは、美に充てる大信仰の詩を其の中に發見するが爲なり」と。

かくも墓地を愛し、寂寞を好みたるハーン氏はまた怪談を好めり。世或は氏の文士としての名をば、アーヰング及びスチブンソンと同架に列する者あり。思へらく、アーヰングにも、リップ物語の如きはあれど、アーヰングの特色は、むしろワイラの如きにあるべく、ハーン氏の幽靈文學、怪談文學を愛せるとは、やゝ其の撰を異にするが如く、かへりてニウ、アレビアン、ナイツの著者スチブンソンに似たるものあるを思ふ。先きにロンドン日本協會の開會せらるゝや、氏は遙に「了然尼」と題する一篇を寄せ、アーサーデオシー氏此れを公衆の前に朗讀せり、了然尼は武田信玄の孫娘にして、東福門院の侍女埋本の法名なり。尼の奇談は、はしなくもハーン氏の詩筆によりて、廣く世界に紹介せられたり。此の一篇を讀みても、ハーン氏が如何に非凡の觀察力、詩的筆致を有せるかを知るに至る。

マルコポロ以來、或はケンプル以來日本を紹介せる外人は多し、而もハーン氏の如く日本を躰せる者はあらじ。吾人は日本學のオーソリチーとして、チエムバレン、アストン、サトウの諸子あるを誇とす、而も三氏は、吾人の管見によれば所謂國學者なり、クラシックスなり。ハーン氏に至りては、純乎たる文士なり、Most brilliant Writter なり、其の日本を理會せると、恐らくは詩人エドキン、アーノルド以上なりしならむ。氏は天性狷介なりしかども、日本に對しては博愛なりき。其の忠君愛國を論じ、神佛を論じ、武士道を論じ、舊日本と新日本とを叙述するを見るに、佳句麗詞に富み、而も文章の平易にして俚耳に入り易き、なほ白居易の詩の如く、珠玉盤に婉轉たるが如し、桑港クロクル記者、「怪談」を評して

Anyone who takes up this book will read it to the end. Mr Hearn has a style that equals of Robert Louis Stevenson; it is rich, Poetical, and full of the Charm of a rare personality.

と、よくハーン氏の文脉を評し得たり。

其著書を擧ぐれば

Stray Leaves from strange Literature.	1884
Some Chiness Chosts.	1887
Two years in the French West Indies.	1890
Youma.	1890
Glimpses of Unfamiliear Japan.	1894
Out of the East.	1895
Kokoro.	1896
Gleanings in Buddha-Fields.	1897
Exotics and Bebrospectives.	1898
Ghostly Jadan.	1899
Shadowings	1900
A Japanese Missellany.	1901
Kotto or Japanese Curios.	1902
Kwaidem.	1903

等なり、嗚呼吾人はハーン氏の死によりて、「日本の眞友」を失ひ、又世界的文豪を失へり。如今何人か、よく日本の內的生活に透徹して、此れを婉麗なる詩筆に載すべき。ハーン氏の如き不思議の筆致を有する天才は、再び得難し、而して今や其の人なし、悲いかな。古來歸化人にして國朝に貢獻せる者、王仁あり阿直岐あり舜水あれど、能文達筆ハーン氏の如きは稀なりしを傷いかな。

新刊紹介

◎日本學生寶鑑　井上哲次郎著

井上哲次郎博士、頃日其の近著「日本學生寶鑑」一册を惠贈せられ、且つ批評を徵せらる。表裝に櫻花櫻花の鏤まれて、清楚高雅を極めたる稀珍本、一見直ちに光彩の燦爛たるを認むべきなり。而して卷頭、敎育勅語と其の漢英譯、五箇條の御誓文、十箇の金條、竟に管公、孔子、ソークラテス、アリストテレース、セキスピアー、カント、ゲーテー、ダーウインの寫像を揭げ、次に博士が學生の修養、處世、成功、衞生、讀書、信敎、嗜美、作法等の心得に關する所見を講述せられ、更に古聖先哲の自警、坐右銘、遺訓等を列記し、且つ添ふるに、志氣の鍛鍊、性情の陶冶に資すべき、詩歌俳句、及び日英佛獨露諸國の國歌を以てし、又博士自作の「孝女白菊詩」と、故落合直文氏の同譯歌とを附錄とし、苟くも我が日本學生の敎科以外に寶鑑と爲すべき重要なるものは、大略之れを網羅せられたり。博士の洽覽博識にして且つ多能なるは、世の夙に推重する所、殊に述作の業に精勤なる、余輩の常に欽慕に堪へざる所とす。今此の書を讀む、又此の感なくんばあらず、其の修身に關する講述や、自ら秩序あり、根抵あり、而も平明の文委詳の辭を以て、自身に經驗せられたる所を說き示して、諄々倦まず。獨り學生のみならず、紳士學者の齊しく精讀密察を要するものあり。就中衞生及び禮法の項は、最も親切叮嚀にして、博士が現在實踐せられつゝある所を、其の儘記載せられたるものなるべく、一として吾人が平素の規範と爲すべきものにあらざるはなし、而して全編の文辭、風韻の掬すべきあり、興趣の味ふべきあり、特に其の細微に亙るの邊、近易にして明快、輕妙にして痛切、讀む者をして覺えず手を拍ち頤を解かしむるの槪あり、特に言文一致體を以て作られたるものゆへ、時として身は博士の面前に坐して、親しく其の懇篤にして快活なる談話を聞くの想を生せしむるに至り、自ら人に感動を與ふること極めて切なるを覺ゆ。但し博士は往々學者的態度—哲學者的態度を以て、學者的生活—哲學者的生活を辭說せられたるが如き傾ありて、いはゆる我田引水の弊なき能はず、例へば「書齋の樂み」の項の如き、然るを見る。是故に或は學生に對して特殊の注意を拂はれずして、殆んど、博士自家の狀態を表白せられたるが如き所あり、宗敎に關しては、專ら敬遠主義を執られ、時に博士主張の倫理敎をほのめかされたる、穩健は即ち是れありといへども、未だ切實なり又透徹なりとは稱すべからざるの感あり。又各項精粗一ならず、中にも公德私德の條は、盡くされざるもの頗る多きが如し。又寫像中、彌迦のを加へられざるは宗敎家を忌避せられだるがためならんも兎に角現に本文

中其の教訓を格言として、あまた引用せられたるに對して、矛盾の處あり、或は率ゐて博士の雅量を疑はしむることなしとせず、坐右銘遺訓の集につきては、德川家康、林羅山、松平樂翁等のものなく、詩にては、僧村庵の富士及天橋の詩、左思の詠史、歐陽修の日本刀歌等を始め、近古の作に至つては、猶多くの感吟を剩し和歌にありては、山部赤人の富士歌、大伴家持の賀出金記書歌、阿部仲麻呂の三笠山歌等、名什の逸せるもの、五六に止まらざるべく、俳句にては、ありたきものゝ見えずして、いかゞはしきものゝ入りたるなど、遺憾の點少しとせず」。(九龍齋主人)

◎熊　娘　　巖谷小波編

世界お伽噺第六十三編にして、マルヤと云ふ娘が瘡傷に惱みて救を求めたる熊を勞はりしため其醜として、熊は一夜娘を負ふて銀世界のバイカル湖邊へ伴ひ、前世紀の動物たるマンモーの牙を掘り集めて之に與へし爲め、娘の一家は俄に富有となりしが、さて是より先き熊は娘に向て翌年も亦來りて寶を授くべき故、此事は嘗て誰れにも語るへからすと云ひ殘して別たり。然るに多辯なる娘は之を父に打ち明したるため、遂に禍を蒙るに至りし筋書也。輕妙はもとよりの事奇拔にして趣味饒多なる物語也。(一册八錢、東京博文館)

政教時報

編輯だより

◎霜は板橋に滿ちて屐痕を留め、曉風冷かにして萬木孤峻、四邊の風物轉た悽愴の感に不堪候。

◎歴史は繰り返すと云ふ、又もや東本願寺は篠原總長辭し、石川舜台入りて總長の椅子に据り候。彼は如何にして此難關を越えむとするか。中外記者に向て語る所の一節を錄せむ哉

僅々四百萬圓の負債ドやて、本願寺の身代に比してはソガ八釜敷云ふ程の事はない、百萬圓宛四顆下より借りさへすれば夫で融通はつく譯ドや、日本も昔より富の程度が大に進歩して居るから、なんば貧乏本願寺でも世の中には多少貸してもあらふ

不相變意氣の壯なる者に候。

◎日蓮上人の銅像を福岡公園に設置し、除幕式を擧げ候。偉人の活現如何にして日本前途を護らむとするか。

◎西本願寺は集會開議中にして、東本願寺の議制局は今年中開會の運に至らずといふ。

◎各宗派より競ふて從軍布敎師を派遣し、軍隊慰問の任に當らしめ候が、所謂任重くして到る處從軍僧の不評判甚しく候よし、もとより何等素養なくして死生の間に立ちて人を導かんとする、山に入りて魚を求むるより尙難き事に候はずや多くの費用を拋ちて不評判を買ひ得たりとすれば、これ程割の合はぬ事はなかるべし。當路者の一考すべき問題に候。

◎基督敎信徒大會は京都に於てひかれ、同時に左の宣言書を發表せられ候。

今や我國振古未聞の時機に際し、國運の發展に伴ひ、我民族の使命愈々重大なるを致すと共に、靈性の渴望亦甚だ切實なるものあらむとす、蓋し健全なる宗敎を傳ふることの急なる未だ曾て今日の如きはあらざる也、吾人基督の道を奉するもの豈決然起て時代の要求に應ふる所なかるべけむや、即ち內は敎會を警醒し各自の靈性を發揮し、外は福音を宣傳し以て個人を救ひ家庭を潔め國民の元氣を振興し、我帝國をして人道の大義に則り其天職を盡さしめざるべからず而して吾人は更に國家の進運に鑑み各敎會の獨立自給を完成し、進んで東洋傳道の志望を貫徹せんことを期す、玆に日本組合敎會信徒大會に於て滿場一致を以て此宣言を議決し敢て吾人の意志を表白す、三十七年十月二十四日於京都

吾人の此に之を錄する豈他意あらむや、以て彼等が抱負を示し併せて、我敎界を覺醒せむとするの微志に外ならず、知らず他山の石以て我玉を磨くべきものありやなきや。

◎東洋女學校は地所の選定も成り愈々來春より開校の運に至りし由。

◎露國俘虜の爲めに精神上の安慰を與へむとする目的にてすでに六月より俘虜信仰慰安會を設けられたるが、此際俘虜の境遇上讀書の渴仰甚だ切なるを認められたるやにて、新古多少を論ぜず、修養向の雜誌書籍寄贈を廣く江湖に仰くよしに候。有志の方は左記宛にて送られなば、同會より我情報局に托し遞送方取斗ふとの事に候。

▲神田區駿河臺北甲町十三、　俘虜信仰慰安會宛

◎本號に歸化人故ハーン氏の傳を掲げ候が、文學博士井上哲次郎氏の談話によれば頗る佛敎尊崇せられ居りたる由に候。談話の要領は左の如くに候

氏は多少哲學宗敎などゝ云ふ思想の方面に心を用ゐた人でありますが、深く佛敎を尊信して居られたやうに思ひます、さうして佛敎とスペンサーの哲學を調和すると云ふことを以て一生の能事とせられたこと疑ひありませぬ、哲學の方てはスペンサーを尊崇し、宗敎の方では佛敎を尊崇し、此兩者は能く調和せられるものであると考へて居られたやうであります、又氏はどうも佛敎を尊信せられて居つたやうでありますが、佛敎の信者であるかどうであるかと云ふ所まで念を推して問うたことはありませぬでございましたが、少なくも氏が深く佛敎に興味を有つて居つたと云ふだけは確かに斷言し得られるのであります、佛敎の事に就て氏が吾々に質問せられたことなどもあります、殊に涅槃の觀念に就てであります、氏の葬式も全く佛葬であつて、瘤寺に葬つたと云ふことであります、其邊から考へて見ても佛敎に少なからぬ緣故を有つて居られたことは推察し得られるのであります。

◎求道學舍の日曜講話は如左候。

○敵近友遠　(十月廿三日午前九時)

○熟せる菓實は自ら落つ　(仝上)

曾我量深
近角常觀

○迷悟　(十月廿日午前九時)

○親鸞聖人の人生觀　(仝上)

樹・龍造
近角常觀

○遠賜觀戰談　(十一月六日午前九時)

○御消息を讀む　(仝上)

安藤鐵腸
佐々木月樵

◎近角氏は報恩講の聖務のため一週間の豫定にて歸省仕候、岩手縣より高橋勘太郎氏、長野より佐崎聿喜氏上京、暫く學舍に起臥を共にせられ居候。道友諸兄の態々遠方より集ひ玉ふ嬉しく候。

◎『信仰生活』、『嘆異鈔』の講話錄近々出版致さるべく候。

右匆々筆を取りて報道まて如斯御座候以上

日曜講話
毎日午前九時
本郷森川町一
求道學舍

第二求道會
午後二時
九段佛敎倶樂部內

第二求道會講話記事

○十月一日　第廿二回　　近角常觀氏出演

◎戰場に於ける信仰力の活現　本會は毎月第一土曜講話後引き續き信仰談話會を催す事となり、今回其初回を試みたるに當日聽衆の過半數約三十名相共に圓座して相互に談し合ひ頗れて先生の眞摯なる談話を拜聽せり因にいふ當信仰談話會に緣あらん人々は何人なりとも出席し得らるべければ、來り會せられよ數時の法緣なりと雖も亦決して空しきに非ざるべし又諸兄姉か他日厚信の緣たるを疑はざるなり

○十月八日　第廿三回　近角常觀出演
◎佛天覆はざる所なし
○十月十五日　第廿四回　北村敦厳出演
◎救濟の聲を聞け。當日聽衆約廿五名
○十月廿二日　第廿五回　近角常觀出演
◎信仰談。當日聽衆五十有餘名
○十月廿九日　第廿六回　近角常觀出演
◎秋曉の感謝　感謝の發現は時と處とを撰ばずと雖も秋曉は殊に感謝深きものなり、氣清くして心澄み、万木風光何れも皆感謝を催さしむるの緣たらざるものなし（帖外御文參照）感謝は物を貰ひし故にとて爲すにあらず、佛の大苦勞を思へば萬の事につけ自ら湧き來るものにして、そこには言ふべからざる味あるなり、感謝といふは茲に信仰の中心があつて、其中心の信仰より無數に畫かれたる圓周の集合せるが如きものなり、故に信仰を擧ぐればそこに一切を網羅するを得るなり、これ信仰上よりなるものにして說明し得られざる所なり、感謝は實に佛陀の光の反謝たるに外ならず而して此信仰は絕對のものにして誰の信仰にも決して淺深あるべき筈のものに非れば何れも皆一致するなり、一致すればこそ一人の感謝の情も發現は能く他の信仰の人の心に反響して共に佛陀の德を仰ぐ事を得らるべきなり、月明き秋の空を眺むれば實に奧深き感のせらるゝものなり、蓮如聖人は新衣を着けたる人を見ては、これも佛の賜なり、我も亦如來上人の御用物にて着食ふよと仰せられ候、又親鸞聖人は、如來上人の偉大なる御苦勞も唯此親鸞一人が爲なりけりと、ピタゴラスは日月星晨山川皆木悉く一種の調和を爲せる音樂なる事をいへりしが人生は實に妙なる調和を有するものなる事は仰信の經驗ある人々は自ら感ずる所なるべし、戰爭といへるものも亦人心の反影である、要するに人生は一の大なる劇場なり、見る處觸るゝ處、踏む處悉く感謝の緣たらざるものなし、如來大悲の恩德は、身を粉にしても報すべし、師主智識の恩德も骨をくだきても謝すべし自然に對して感謝する所多ければ殊に人生に對しては一層深く感謝する處あるなり　一家の間一國の間廣く人生の間には一の大なる調和あり、これ時に反對ありと雖も、衆流の悉く大海に注ぐが如く人生又悉く調和ある音樂を奏しつゝ佛陀の中心に向ふて進むなり、聽衆約五十名

獨乙だより

吾兄、日本の宗教界如何。西洋にくらぶれば日本の宗教界及人心尙頼しき所あるを御發見なさるべし。西洋の主義がナンデも形式的に走り精神的を放るゝに驚き申候ふ。小生只今カドリツクの國に住んで居り候ふ故、其國の事を元にして御話致すべく候ふ。宗教の精神死して形骸存するのみの有樣に候ふ。

何の爲めに日曜日は寺へ參るのか、甚た理解に苦しみ候ふ。下女も職工も早朝より寺に詰めかけ候ふ。しかも其等の人間の心掛は甚た不宗教的なるに候ふ。彼等全く無意識的習慣的に參るものにして、甚しきは男女互に面會の場所と心得て往くものも有之候ふ。又寺の方より見れば其吸引力强きもの有之候ふ。君思へ、日曜日には凡ての店皆閉され市中をアルクも何の見るものなき時、寺院の鐘樓未明よりひゞき門戸開放し中には有名なる音樂のきくべきあり。雨天にて野外の散策など叶はざる時はセヒ寺に足を引くやうに相成候ふ。

カドリツク信者の頑冥にも驚き候ふ。日曜日は安息日なりとて仕事をするもの少なみ候ふ。私ナド病院にて日曜日に患者の繃帶を交換せんとすれば、宗教の看護婦イヤナ顏をいたし今日は日曜日だと申候ふ。日曜日でも患者を治すのは醫者の務めと申てもそれが理解が出來ぬに候。病院には病室の中にも十字架あり、例の犧牲一本の聖像かゝり戸の入口には御水まりといふ工合にて堂々たる大學病院までが此支配をうけて居るのに候ふ。實に形式上に於て浸潤せるもの

學生中にはカドリツク學生團なるものあり、眞劍勝負を禁ずて居候ふ。唯Bierのむことは盛にヤツテ居候ふ。學生の團体なるものが單に虛飾や牛飲や決鬪（正しくは眞劍仕合）に終り、毫も精神上の教養切磋琢磨あるにあらず、少しも感服いたされず候。

近來惡風改良會や、惡風出版物禁止會などの起るのは決して物數奇の譯にはあらず、時勢の必用上より起りたるものと考へ候ふ。惡風改良會の演說中には、今の人の頭に道德と云ふ考は茶の葉一を百度煎じたほともないと慷慨した人此あり候ふ。

今の有樣では物質的、利己主義に走り、一方に於ては涙香氏の所謂獸我のみ强くなりては如何に物質文明の美燦爛としてキラメキ候ふとも、其基礎瓦解する時の來るべきこと疑なかるべく候ふ。

吾兄よ、日本にて生意氣に西洋の物質文明の弊所に醉ひ遠き將來を思ふことを忘るゝ人あらば假借なく御攻擊下さるべし。日本には美風尙存し、人心の中頼しき所有之候ふ。時代の變遷オソロシク候ふ。吾兄必ず御注意下さるべし。

日本の宗教は尙頼しき所あり、西洋の形骸のみなるのとは別に候ふ。御自愛御奮發下さるべし。

獨乙より　久保猪之吉

文學士 近角常觀序
百目木劍虹著

信仰生活

袖珍美本
定價貳拾錢
郵稅四錢

人生は闇なり迷なり、迷なるゆゑ、そこに悟あり、闇なるゆゑ、そこに光を見るにあらずや。吾等は迷ひつゝ悟る也、悟りつゝ惱むもの也。迷悟もと二あるにあらず、煩惱菩提一なりと知らずや。これ宗教的經驗を經たるものにあらずんば個中の眞味を語るに足らざる也。

『信仰生活』の一篇正さに是也。實驗の士は底深く穿かたれぬ懺悔の泉は清らか也。苟も信仰の渴を醫せむとするもの來りて清泉の流を流め。

發兌元 東京市本郷四丁目五番地 文明堂
賣捌所 東京市本郷森川町一番地 求道發行所

教界偉人叢書第五編
釋宗演師校訂 大崎龍淵先生著 ▲新版

白隱禪師傳

▲口繪白隱禪師の肖像入 ▲菊版二百三十頁餘
▲上製六十錢 稅十錢 ▲並製四十五錢 稅十錢

武人と禪、何ぞ其歷史の多き、吾人武士道を得んと欲せば禪に參せざるべからず。政客と禪、何ぞ其の關係の深き、吾人政治家たらんと欲せば禪に參せざるべからず。電光石火の中に於て。神出鬼沒の妙用を廻らすは、禪の修養如何にあり。禪に參せんと欲するものは、近世禪林の復興者白隱禪師を知らざるべからず。白隱禪師を知らむと欲するものは、此白隱傳を讀まざるべからず。白隱禪師に關する著述甚だ多しと云へども而もその精確なる傳記に至りては一としてこれあるなし本書は此の缺點を補ひたるものなり。一讀再讀に値すべき好著なり。

發兌元 東京本郷四丁目五 文明堂
同 京都市西六條 興教書院

●毎月三回三の日發行

教界時報

定價 壹部 金參錢
一年前金一圓（郵稅不要）

●第三十三號要目（十月二十三日發行）

▲親鸞聖人の人格……前田博士 ▲會衆諸公に與ふ……社論
▲實踐上の訓誡……內田愚士 ▲一年の回顧……秋星 ▲宗教と倫理……泉學士 ▲筑波の二日……千畝 ▲奇怪なる風聞……評論 ▲本門寺の會式……武田氏の韓國布教談……天日錄……大事小事……教界小事……讀者の聲寄其他評論雜報數十件

本誌は教界に於ける非教學主義の陋見に反抗して起り理想と信仰とに據て立つ教界唯一の機關にして活佛教新信仰を鼓吹すると共に教界の時事問題に關しては忌憚なく正議硬論を主張し一毫借ずる處なし憂法求道の士は乞本誌を讀め

發兌元 東京市本郷區弓町二ノ八 大樹園
東京市本郷四丁目 文明堂
京都市西六條 興教書院

◎申込所
◎大賣捌所

豫約募集

攝光院 大谷勝尊師題字
文學博士 南條文雄君序文
嗣講 池原雅壽講述

五十八帖 御文講義

付 洋裝假綴美本 全拾五冊
紫用紙菊判上質
引紙數凡四千餘頁

御文は淨土眞宗中興の聖人懸燈大師の御製作にかゝるものにして眞宗の眞髓を極めて圓滿に發輝せられしものなれは苟も門派末流のものは御深意を獲得せんと欲する者は斯の書を措て他にあらざるなり然るに之れを詳細に講義し一目瞭然たらしむる書なきは眞宗に於ける一大缺點なるのみならず世人の常に遺憾に堪へさる所なり

然るに眞宗學界の泰斗と仰るゝ池原嗣講師は大に茲に鑑みる所あり數年前より師か徒弟に對し極めて平易に極めて明晰に講述せられる門弟子は師の言句を剩す處なく熱心に速記し師に校正を經て梓に上らしめ末世の好紀念とせんとする願ふに御文の眞味を咀嚼玩味せんとするものは恐く斯の書を措て他にあらさるべく尙將來斯る名僧か遠大の希望によりて腦漿を控り詳細明確なる講義をなさるゝことを得て望むへからさるは深く信じて疑はさる處なり弊店曩に眞宗聖教大全を出版し門末信徒諸君に多大なる裨益を與へしを思ひ今亦た斯る絕大の書を眼前に看過するは深く遺憾に堪へさる所なり依て此際嗣講師に請ひて印刷に附し極めて確實と廉價とを旨として豫約出版をなし同好の士に頒たんとす而して該書は或る事情に依り再版を許さゝる事となれるを以て此際御失念なく陸續豫約申込ありて自分の裨益のみならす子々孫々に御文の御深意を徹底せしむる好指導たらしめんことを希望す

發行所 金澤市石浦町 横川湊文堂

豫約申込手續

製本體裁 菊判洋裝假綴美本全拾五冊
印刷正實 總て印刷に誤字なき事を期す

豫約期限 豫約募集期限は本年十一月三十日限りとし期限後は（豫約加盟者の外既賣せず）御購求に應せず

豫約價及拂込法 豫約價を分ちて左の四種とす但し豫約の御申込あるも期日迄に拂込なき時は破約と見做す郵劵代用二割增し

甲（一時拂込）金五圓 本年十一月三十日迄に一時に全額拂込の事

乙（二回拂込）金五圓五拾錢 本年十一月三十日迄に半額弐圓七拾五錢拂込殘額は十二月製本出來通知す即時拂込の事

丙（月賦拂込）金六圓 本年十一月より明年二月迄に毎月壹圓五拾錢宛四回に拂込の事

丁（一時拂込）金壹圓五拾錢（各一帖に付） 五帖を五つに分ちて一分或は二分豫約申受く何通又は期限後他の帖購求に應せず 本年十一月末日迄に一時金壹圓五拾錢拂込事

製本出來豫定期日及送本 本年十二月中旬より明年二月限り全部完結す送本は申込順に從ひ本年十二月中旬より順次明年二月限り全部送本す

送本料 市外全部金五拾錢（丁は）各一帖毎に金拾五錢宛を申受く

送本注意 市外送本は堅牢なるボールに包み遞送し破損等の忠なきことを期す

發行所及豫約申込所 石川縣金澤市石浦町 湊文堂 横川藤太郎

豫約申込所

京都市下珠數屋町東洞院西入 護法館 西村九郎右衛門
京都市五條通高倉東入 法文館 澤田友五郎
東京市本郷區春木町二丁目 擁萬閣 森江英二
東京市芝區露月町 鶴岡縣久留米市米屋町 鴻盟社 今村金次郎
新潟市古町通り七番丁 金文堂 竹内光儀
長岡町裏四ノ町 菊平社
名古屋市門前町 北黑十郎
長野市大門町 三浦兼助
西澤喜太郎

第二版

眞宗聖教大全

和裝菊判形全三冊帙入
紙數二千四百五十頁

正價 金參圓五拾錢 五百部限り特別廉價金貳圓
小包料金參拾錢

近時宗教ニ哲學ニ討究セラル、ノ士頗ル多キヲ見ルナリ而シテ資料トシテ我宗教界ニ用ヰラレタル諸聖教其數百余種アルハ己ニ諸士ノ知ラル、如ク其價七十余圓ノ高キニアリ爲メニ世ノ信仰アル諸賢ニシテ之ヲ一讀スルモノナキハ勿論此等宗教ヲ研究スルノ士甚タ難事トスル所ナリ弊店之レヲ憂ヒ印刷ノ任ニ當リ聊カ宗教界ニ貢献スル所アラント欲シ前キニ初版三千部ヲ出版セシニ江湖諸君ノ喝采ヲ得希望者ノ全員ニ渡ラスシテ夢中ノ間ニ全部賣切ル然ル處尙ホ續々購求ノ諸士アルモ遺憾ナカラ應スル能ハス茲ニ或局部及ヒ討究諸士ヨリ再版方ニ就キ懇篤ナル交渉ヲ受ケ辭スルニ言ナク愈々今回ハ汎ク希望者ヲ募リ以テ貢献ノ軌道ヲ脫セサル爲メ特別ヲ以テ廉價販賣スル事トナレリ素ヨリ本書ニ至テハ初版同樣原本ト異ナル所ナシ其他體裁優美代價ノ低廉ナルハ本書ノ外實ニ無比ナリトス宗教ニ志アル士一本ヲ購フテ机上ニ備フルモ其裨益亦僅少ニアラサルナリ然モ再版モ亦部數ニ限リアリ先回購求洩レノ諸士ハ勿論其他ノ士此機會ヲ脫セス續々御購求アランコヲ乞フ

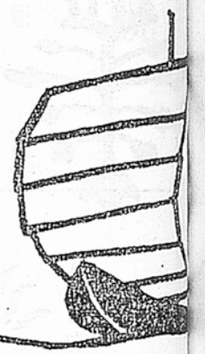
發行所 石川縣金澤市石浦町五十四番地 横川湊文堂

眞宗聖教大全目次

◎教行信證延書◎略文類延書◎三經往生文類◎尊號眞像銘文◎一念多念證文◎唯信鈔文意◎末燈鈔◎御消息集◎歎異鈔◎口傳鈔◎改邪鈔◎執持抄◎本願鈔◎願々鈔◎最要鈔◎出世元意◎拾遺古德傳◎慕歸繪詞◎最須敬重繪詞◎淨土眞要鈔◎諸神本懷集◎破邪顯正鈔◎教行信證大意◎顯名鈔◎決智鈔◎存覺法語◎持名鈔◎女人往生聞書◎步船鈔◎報恩記◎法華問答◎淨土見聞集◎正信偈大意◎御一代聞書◎實悟記◎蓮如聖人遺德記◎反古裏◎唯信鈔◎後世物語◎一念多念分別事◎安心決定鈔◎愚禿鈔◎入出二門偈頌◎易行品◎後出阿彌陀佛偈經◎十二禮◎淨土論◎往生論註◎略論安樂淨土義◎讚阿彌陀佛偈◎安樂集◎玄義分◎序分義◎定善義◎散善義◎法事讚◎觀念法門◎往生禮讚◎般舟讚◎往生要集◎選擇集◎六要鈔◎會本◎往還廻向文類◎述懷和讚◎帖外九首和讚◎親鸞八十八歲御筆一名獲得信心集◎見眞大師御傳鈔◎御式文◎嘆德文◎興御書◎一枚記請◎御俗姓御文◎夏御文◎領解文◎改悔文◎帖外御文五帖◎山科連署記◎蓮如聖人御法語◎三心三信同一事◎辨述名体鈔◎實教廿一ヶ條◎纔解記◎眞宗大綱御消息◎眞宗信心鈔◎眞宗持專抄◎往生明文集◎親鸞上人血脈文集◎眞宗至道鈔◎眞宗用意◎女人教化集◎一念發起鈔◎難易分別鈔◎聖道淨土名目◎眞宗教要鈔◎一心歸西鈔◎淨土法門見聞鈔◎眞宗教化集◎横川法語◎念佛明要抄◎安心決得抄◎女人最要集◎安心用意集◎持要抄◎選正抄◎親鸞聖人御因緣秘傳集◎眞宗鈔◎他力自力事◎彼岸記◎無常說記◎光明名號因緣◎自要集◎大日本國粟散王聖德太子奉讚◎覺如上人敬白文◎一宗意得之事◎顯淨土眞宗抄◎眞宗正意抄◎袖中抄◎一念成就聞書◎聞信抄◎持得抄◎安心定得抄◎黑谷上人傳

若し念佛するものは、
當に知るべし、此人は
是人中の分陀利華なり。
觀世音菩薩、大勢至菩薩
其勝友と爲り玉ふ。
當に道場に座して、
諸佛の家に生ずべし。

（觀無量壽經）



文學博士 南條文雄師述 御傳鈔講話

第一編

好評嘖々再版出來

△一部三錢郵稅二錢
△百部以上二錢五厘宛郵稅別
△五百部以上二錢宛郵稅別
△千部以上特待法あり照會あれ

之は親鸞聖人御傳鈔上下二卷の說敎として居ます、平易に而も有難く、誰れても讀める樣にできて居ます、一讀よく博士の說敎を聞くが如くである、希くは布敎の爲に澤山施して御遣りなさい、本社は實費を以て之を諸子に分ちます、

住田智見師述（十一月二十日發行）

親鸞聖人小傳

第二編

△定價同前 △訂裝頗美

住田先生の熱情ある筆を以て、親鸞聖人の小傳を書いた者であれば、報恩講施本は勿論、新年送り物や、傷病兵慰問などに選ふて適當して居ります、

擬講

佛敎婦人

月刊雜誌

第四卷第十一號發行（十一月三日發行）

價一部六錢 年七十二錢 郵稅共

本號には伊藤吉川氏の堅忍持久、齋藤唯信氏の交友の敎訓、濱口黑蹤氏の萬歲と念佛あり、裁縫料理婦生、又は御伽噺考物など例に依て材料豐富、興味津々、佛敎界中唯一の婦人であります

發行所 東京巢鴨二二五五 家庭社

規定

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

◉廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年十月三十日印刷
明治三十七年十一月一日發行

發行兼編輯人 百目木智璉
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

（電話下谷二四三二）

東京市神田區神保町

發行所 東京堂
同 本郷四丁目
大賣捌所 文明堂
同